

山とスキー

第五十二號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿日第三種郵便物認可
大正十四年八月三十一日印刷納本

大正十四年九月一日發行 (毎月一回)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號二十五第



卷頭言

研究

クリスチアニヤ・ターンの分類的考察
 スキー登山とスキースポーツと
 スキー競技練習の一般的注意

想片

斷崖 (詩)
 スキーの思出 (二)
 モン・ブラン初登山の話
 驢馬翁 (旅行記)
 彙報抄録

寫眞版

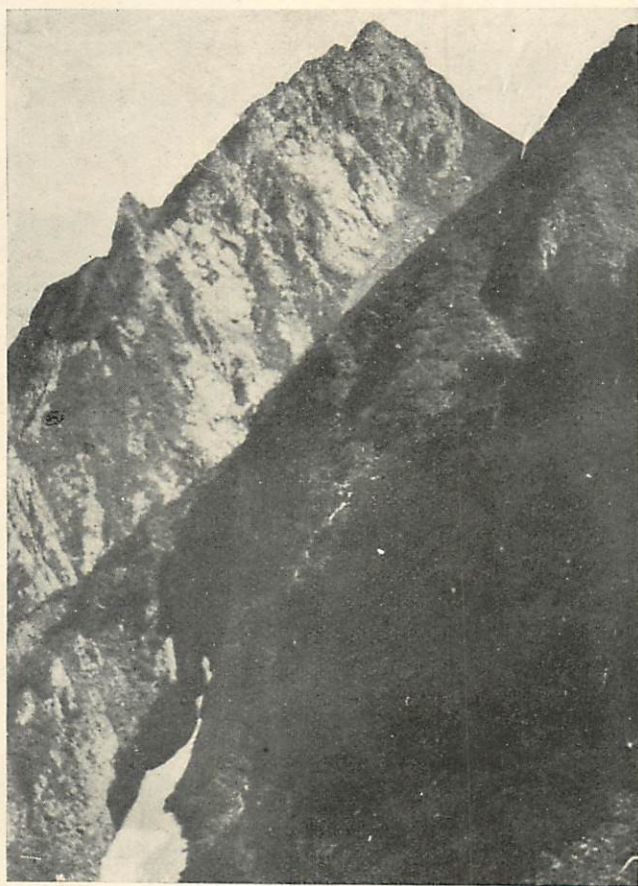
アシユベツ岳 (一)
 アシユベツ岳 (二)

中野誠一 (一三)
 赤松勳 (一八)
 岡村源太郎 (二四)

相川正義 (三四)
 大野精七 (三六)
 加納生 (四三)
 西村眞琴 (四六)

坂本生

大正十四年九月發行



アシュベツ岳(一)

坂 本 生



アルバータを誇る

山岳を、各が生命の如く愛する者の誇りである。

亦各スポーツに近代的意義を見出し勇躍する若人の誇りである。

否限られたるそれ等の人々に許さるゝのみではない。それは、若き日本の凡ての胸々にまで、牢固として植えられた最も光榮ある誇りである。

云おう『一九二五年七月二十一日、無人の神秘境カナディアン・ロッキーズの峻峯中の峻峯「怖ろしの山」と呼ばれ、名だたる世界各國登山者の幾回かの試みさへ無効に更に神秘に更に巖々として聳え立つた處女山アルバータも、遂に吾等親しき日本登山隊に由つて、最初の足跡を刻印せられたのである』と。

十六時間に餘る苦闘の後に——こは只、最終の日の事である。こゝに至るにさへ如何ばかり長い忍苦の年月と眞摯なる努力と、さて燃ゆるばかりの山への憧憬があつたか。吾等思ひを潜めるを要する——アルバータの山嶺に達した時、午後七時半、今や再び沈黙の中に、たそがれ行く偉大なる山々の、波浪にも似たるを眺め、ウーレー、

トウインの峯々も靜かに、夕靄に閉ぢられて行くのを指呼し得た時、如何に、それは悠久な自然に、ひたりと呼吸を合せた尊い詩の瞬間であつたらうか。遠く旬日の、巡禮を續けたアサバスカ河の一部が黄金に夕陽に輝いた。

その時吾「アイガーの嶺」は云ふ『はるばると海を渡り、森に幾日の旅を續け、命にかけての登攀に成就して頂上に立つたのである。よろこびに胸も躍らう、血も燃え様、しかし或は又さうでない氣もする……』そして一行六人は靜かに握手する事が出来るのみだつた。

偉大なる感激の場シヅ景でないか、吾々は、亦何をその上に附け加へ得よう。そして勝つて尙驕らざるこの一語こそ吾々の共感の胸を通して、ひた／＼と押しせまるものがあるのを覺える。吾等自身亦その偉大な劇的場景に、酔へるを思ふ。

今回横有恒氏をリーダーとしたカナディアン・ロッキー踏破の成功は、けにあらゆる意味に於て一つの劃期的事業であらう。

若き日本は、この世界的壯舉の成功に對して心よりよろこびを持つ。そして吾等の胸に、常に富士の秀麗なる姿が反映するとともに、又今後アルバータの姿も活きるであらう事に絶大の誇りを感じるものである。

クリスチアニア・ターンの分類的考察

中 野 誠 一

スキーイングの各種のテクニクを決定的に記述する事は、厳格な意味から云へば不可能であると云ふ事が出来るだらう。何故なら、總ての人が一つのテクニクを全く同じ方法で實施して居る事は云へない。十人十色で各々がその個性をもつて居る。然し大体に於てはそのテクニクに一貫して居る方法がある事だけは認められると思ふ。

スキーイングのテクニク中で最も雑多な實際的方法をもつて居るのがクリスチアニア・ターンである。筆者は今大膽にも、その廣汎なクリスチアニア・ターンの各種のテクニクを分類的に考察して見やうと思つて居る。

クリスチアニア・ターンは往々初期の練習者にはその要領が呑込み惜い事があるが、一度その要領をマスターすれば比較的進歩の早く見えるターンである。そしてターンの中では最も簡單なものであつて、多くのランナーは、雪質、斜面の形状の許す範囲で出来るだけ多くのターンを此のクリスチアニアで間に合せやうとするものである。

然し前述した通りクリスチアニアと一つの名稱を附して居るがその實は可成多くの差異を有して居る。その差の重要な點は体重の配置如何とこれに伴ふ体全部の姿勢である。あるものは体重を左右の脚に平等に委ね、あるものは多く前脚に又あるものは後足にと、全然その方法を變へて居る。そして此の何れが眞實のクリスチアニアであるかと云へば無論、何

れも同程度で、又それ／＼特長と缺點とを備へて居る。又、練習者に就ても、それ／＼個人によつて最初に要領を握る點が異なる爲か、或は前足が得意であり、或は後足が得意である等、多岐な現象を呈し得る。

然し、總括的にその、シフチングなる點から區別して、次の四通のクリスチアニアに分ける事が出来る。

第一のクリスチアニア。主に兩脚平等に体重を委ねるものであつて、純クリスチアニア (Pure Christiania) ステアリングクリスチアニア (Steering Chr.) 等と云つて居る。急動クリスチアニア (Tarked Chr.) も此の一種である。

第二のクリスチアニア。主に前出脚に体重を委ねて廻るものである。

第三のクリスチアニア。主に後脚に体重を委ねて廻るものである。

第二のクリスチアニアと第三のクリスチアニアとは、オープンクリスチアニア (Open Chr.) と云つて居る。

第四のクリスチアニア。廻轉の途中で体重を後より前にシフトするものであつて、ダウンヒル・ターンには甚だよく

利用される。

ヒューア、クリスチアニア (第一のクリスチアニア)

体重が大体に於て、兩方のスキーに分配されるものであつて、甚だ簡單ではあるが、バランスミ云ふ點では可成り練習を要するものである。

主に斜滑降からか直滑降からかのアップヒルターンに用ひられ、又多くはストツブターンに用ひられる。無論そのターンが停止に了らなくとも差支へは無いが、此れは、自己の欲する點に向ふ様適當にターンをチェツクする事が割合六ヶ敷いものである。又、ダウンヒル・ターンは甚だ困難であつて一般には殆ど用ひられない。

大體に於てあらゆる傾斜に利用出来る。特に高速度の場合には、やり方さへ上手であれば甚だ有効なターンである。然し、雪質に對しては甚だ制限されて居る。即ち、硬雪か、乾雪には樂であるが、濕雪の場合はごく淺い時でないと困難で

あるか殆ど不可能である。又、硬皮雪の時は不可能である。その方法を分解的に示せば先づ次の様になると思ふ。

直滑降よりアツプヒルのストツプ・ターンの場合

一、前スキーの位置をやゝ後へ曳いて殆ど両スキーを同じ位に揃へ、体重を兩脚平等に懸け、兩膝を接し氣味にして、前方に上体を傾けて、完全なトー・ウエイチングを行ふ。

二、廻らうとする内側スキーの外エツヂと、外側スキーの内エツヂを少しく立てる。次の瞬間に稍、腰と膝とを急に伸す。その瞬間に、尻を廻らうとする外側から谷へ向けて、力強く振る。

スキーは廻轉を初める。

三、廻轉を初めれば両スキーは前後に可成り開くのが普通である。従つて淺いテレマークジツツエンの型になる。此時兩脚の体重を平等に保ちながら、前のトーウエイチングより急にヒールウエイチングに移る。

スキーは最早肉体的努力なしに廻轉を持続する。

四、スキーが殆ど水平になつた時、再びヒールウエイチングよりトーウエイチングに歸れば、スキーは稍々上向き位置で停止する。

此のターンの主要な部分は尻の捻り、即ちボディイスウイングである。ボディイスウイングによつてターンの目的を達するのであつて、三の動作なるヒール・ウエイチングは、只そのターンの完成を助長させるのが目的である事を記憶せねばならない。

一の動作は全く豫備行動であつて、両スキーを揃へる事はその廻轉運動の中心になる部分を小さくする爲である。又一の動作の中、腰と膝とを屈ける事は次のそれ等を伸す事の豫備的姿勢である。トーウエイチングも無論、廻轉の中心をスキーの中心に近づけるに他ならない。

次に二の動作の中、膝と腰を伸ばすとある。前の姿勢の場合急に膝と腰とを伸ばせば、その瞬間には、体重の全部では無いが一部分乃至大部分はスキーから抜き去られる事になる。そのスキーの負荷量を軽減して、云ひ換へればその抵抗を少

くしてスキ一の廻轉運動を圓滑ならしめるのである。であるから、此の二つの運動は全く同時に行はなければ何の役にもたない。その前のエツヂングは廻轉の初期に受ける雪の抵抗を少くする爲である。

此だけの動作が完全に行はれたら、スキ一は自身のステアリング・アクションで自然に廻轉を繼續して行く。そして或る場合には全然三の動作の不要なる事もある。硬雪か淺乾雪の場合は特に左様である。

三の動作即ちヒールウェイチングはそのスウィングを、早く完成せしめる目的にある。後方に体重を偏せて、スキ一のテイルを早く下方に落す目的であるから、此のヒールウェイチングを永く持續すれば往々廻轉し過ぎて、スキ一が山向きとなり後滑りをする事がある。そこで第四の動作が必要となるのであつて、もし出來得るなら、例へば、雪の抵抗が小であるか、急な廻轉を要さない場合には、全く三のヒールウェイチングをばいいても良い。

ジャークド・クリスチアニアと云つて居るのは、全く、此のビュアクリスチアニアの一種であつて、全く、一の動作即ち豫備的の動作の後、巨大なボディスウィングで二の動作を行ひ、三や四の動作をほどこす豫猶すら與へないものである従つて、ステアリングを利用して廻轉を持續する事が無いから、殆んど、停止した場合に、そのターンの前になした滑降のトレースと同一線上に体が位置するものである。

此のビュア・クリスチアニアに於てボディスウィングの後、即ち二の動作の時、膝と腰を充分深く屈ける事はスタビリテイの上から甚だ有効である。特に速度の大なる時には是非とも必要な事である。外國の名ランナアは我々の想像以上に深くかむ様である。

扱、次には此のビュア・クリスチアニアの上体の運動には如何なるかを説明する。

一寸不思議に感ぜられる事には、同じ此のスウィングをするに、全然逆な二つの上体のスウィングが普通行はれて居る一つは肩が初め廻らうとする外側の方が、ボディスウィングの豫備動作の時稍前に出され、次にスウィング中に内側の肩を前に出して、最後には上体がスキ一と平行の姿勢になり、体は谷向きとなり横腹は内側の方が伸び、尻は山へ向くの姿勢をさる上体のボディスウィングである。他の一つは、その逆に、初め内側の肩を前に出して、ボディスウィングをその

肩を後に廻す事によつてやる前者と全然反對の姿勢とがある。

然し一見、全然相反する上体のスウィングに於ても、同じ結果を得るのは何故であるかと云ふに、前者は、上体のボディ・スウィングを行ふに、全く腰を中心にして、上体だけをスウィングするのであつて、腰からは全くその反作用を受けるのである。即ち上体は、欲するスキーの廻轉方向と逆の廻轉であるが、腰からはスキーの廻轉方向と一致して居る譯である。後者は、体を全部スウィングさせる方法である。結果に於ては殆ど同一であるが、前者はやゝ前方に懸り易く、後者は後方にかゝり易い。何れが良いかは斷言出来ない。人の得意不得意による事が多く、左右何れかを前者でやる人は大抵反對の方向のターンには後者を用ひる事が多い。

腕を振る事は勝手である。或る人は、初めの豫備的動作に、兩腕を廻らうとする内側の横上に舉げて、ボディ・スウィングと同時に外下に振り落すが正當であると説く人があるが、全然意味の無い事であつて、單なる末枝にすぎない。どちらかと云へば故意とらしくて氣持が悪い。腕は振るなと云つても、自然に振れるものである。その自然的の振り方が、そのターンには最もふさわしい振方である。

オープン、クリスチアニア (第二、第三のクリスチアニア)

ビューア・クリスチアニアに對して第二、第三、第四のクリスチアニアをスキーの先が互に開き離れる點から、オープン・クリスチアニアと云ふ。

此のオープン・クリスチアニアは主に兩スキーの角度を作る爲に生じるラダー・アクションを利用するもので、ボディ・スウィングやシフト・チンギングは用ひない事を原則として居る。だから肉体的努力が少なくてすむ故に最も多く用ひられ易い。

前にも述べたが、此のオープン・クリスチアニアを純然たる二つの異つた方法に分ける事は或は不可かも知れないが、極めてテイビカルな場合を考へると甚だ大差ある二つの種類を生じる。一つは主にその体重を後に出したスキーに委ね、

他は前のスキーに委ねる。云ひかへれば一つは廻らうとする外側のスキーに、他は内側のスキーにその体重を懸けて廻轉するものである。

前に体重を懸ける方法はより一般的であるが、アップヒルターンには都合が良いが、ダウンヒルターンは多少困難である。後に懸ける方は、比較的ダウンヒルターンが容易である。然し、後者は特にアップヒルのストップターンの時には廻りすぎる事がある。又、雪と云ふ方面から考へるならば、前者後者共に、上層硬雪、濕雪、深雪には殆ど不可能である。然し、どちらかと云へば、雪の深い時には後者の方が可能性が多い。

直滑降よりアツプヒル・ターン（体重を前スキー即ち廻らうとする内側のスキーに委ねる場合）

一、前脚の膝を少しく屈け方を深くしながら、前スキーを約十五程位前方に出し、その踵を擧げる事なくトウウエイチングとなる。後脚は体重を抜き、心もちその踵が擧がる位にする。

二、後スキー即ち体重を抜いたスキーをやゝ内側のエツヂを立てゝその後端を軸として、その先端を三十程位外方に開く、同時に僅かに前スキーの外エツヂを立てる。

そして廻らうとする外側に上体を捻ぢ腹を突き出し内側の肩を高く前に出し外側の肩を下ける。スキーは次第に廻轉を初めるであらう。

三、内側のスキーが新しく向はんミする方向に迄達した時に外スキーを曳いて揃へるならば、その新しい方向に向けて直進を初める。もし前の姿勢を持續するならば最後には停止する。

（体重を後スキー即ち廻らうとする外側のスキーに委ねる場合）

一、前膝をやゝ伸ばし、全体重を後スキーに懸け、上体はやゝ反身になつて後膝をやゝ深く屈し、ヒール・ウエイトとなる。

二、前スキー即ち廻らうとする内側のスキーを極く僅かに内エツヂを立てゝその後端を軸としてその先端を約二十程外側、換言すれば廻轉する方向へ開く、そして僅かに内エツヂを立てる。

そして上体を内側に捻ぢその肩を下げ、外側の肩を高めて尻を外側に廻す。スキーは直に廻轉を初める。

三、外スキーが新に向ふ方向に達したら、内スキーをもとにもどして外スキーに並行にするなら、直に直線滑走に變るその姿勢を變へないなら、終には停止するのである。

以上の二種のターンは、そのシフトと云ふ點では全く相反して居るけれども、その原理には此の變りも無いものである前者は外側のスキー、即ち後スキーがラダー・アクションの、ラダーの役をつとめ、後者は前スキーがその役割をして居るに過ぎない。そして、上体の姿勢の異つて居るのは、その体重の分配の違ひから、最も有効な形になつて來たもので人体の構造、即ち解剖學的に來る必然的のものである。

然し乍ら、此兩方法は確然たる區別があるものでは無く、示した所は只その極端なそしてティビカルな場合に過ぎない。従つて實際上は此の兩者の間に無數の中間的方法の行ひ得るものである事を特に注意して貰はねばならない。

此のオープンクリスチアニアに於て最も重要な點は、一度兩スキーの角度を開いたなら、その角度を廻轉を持続させる間、決して變らない様に、充分確實にその位置を保持する様に努力する事にある。此の事は、オープン・クリスチアニアの實行上最大條件であるが、此の事は、テレマーク・ポジションを保持し乍ら、テレマーク・ターンを行ふ時のそのポジションの保定程困難では無いのである。然しその重要さは、敢てテレマークのそのポジションの重要さに劣るものではない。此れが不確實の場合にはそのターンのトレースが甚しく損はれると云ふ欠點も生じるが、ターン中にその廻轉度が或は大になり或は小になる等甚だ不規則な廻轉度を續かせるから、そのスキーの受ける抵抗が必然的に不規則になり、或は前後にのめつたり、或は左右に倒れたりする機會を多く生ぜしめるものである。即ち、此のポジションの確實か否かは直ちにそのターンのバランシングの良否に影響するものである。

次には上体の姿勢である。前足に委重するオープンクリスチアニアは、上体を外に捻ると云ふ事はその足と腰との筋肉を前のポジションを保持する上に比較的都合よく確實性が大なるが爲である。試みに前足に体重を懸けて上体を廻轉の内方に捻じたなら、思はぬ間に、後に曳かれるラダーリングスキーはその角度を狭めて了ふ事が多い。

又、後スキーに委重した場合、上体を内方に捻る事もその目的の一部は此れと同じ事であるが、此の場合はそのラダリングポジションは前者よりも遙に保持しやういが故に前者程、此の點には重要さをもたない。少しく技術が進歩すれば前脚に体重をのせたと同じ様な姿勢で後脚に体重を委ねてターンする事が出来るものである。此の体を内側に捻る目的の大きな部分は次に述べるボディスウィングによるターンの助成にあるのである。

前脚に委重するクリスチアニアでは内肩を上げ腹を突き出すと説いた。此の動作はとりも直さず、廻轉の外方に向ふ力を與へる事になる。又後者のターンの場合には、上体を内側に向け、従つて尻を外側に捻る事も又同様、廻轉の外方にその力を働かす事になる。此の力によつて換言すればこれらのボディスウィングの力によつて、ラダーアクションによる廻轉を助けて、そのターンを小さくするものである。故に、此等のボディスウィングを急に力強く行へば自然、ターンの半径は小さくなり早く了る事になる。

然し何れのターンの場合でも、初手から、此のボディ・スウィングを急にかつ強く行ふ様に練習する事は不得策である。急にターンする事は急に抵抗を増す事であるから、ターンは早くとも、バランスを失ふ結果に陥入りやすいのである。故に初めは、ラダリング・ポジションを確實に保つて、比較的徐々にボディ・スウィングを行ふ事を練習しなければならぬ。そして次第に急なスウィングに移るが良いと思ふ。

腕の振方や何かは大した問題では無いが、言を重ねるが誇大な身振りは止したが良い。心ある者には甚だ輕薄に感じられる。自然に振るが良い。否自然に振れて来るものである。知らない間に最も自然な振り方になる。

次には何れのターン即ち、前に体重を懸けるか、それとも後にか、が良いかと云ふ問題になる。アツプヒル・ターンの場合には何れも同程度である。もし雪の硬い場合なら、何れも同じであるが、もし多少の深さを有する雪では廻轉そのものは、体重を後に委ねる方が容易である。これは、重みを多く受けて居るスキーの方が廻轉の傾向が大であるから、後に重さを多く受けて居る場合には、即ち外側に多く重みがあるから、此の方の廻轉の爲に、内側のスキー自身が外スキーに押されて廻轉される現象を呈し、前足即ち内側に体重を多く受けて居ると外側だけがとり残されて、ラダリングポジション

ンが崩れる事が多い爲である。然し、本来のバランシングと云ふ點からは前足に委重した方が確實である。何となれば外スキーは一朝バランスの失はれた場合、機敏に外に開いて重心の支持範圍を廣め得られる利益があるが、後スキー即外スキーに委重した場合、前即ち内スキーは、アツプヒルの場合には山側にある爲にその機敏さを失はれ勝である事に起因する。然らば初心者に奨めるのは何れの方法が良いか云へば多くは後の足に體重を委ねる方から練習させる方が良いと思はれる。此は前述したオープンクリスチアニアの第一條件たるラダリング・ボジションを保持する事が容易であるが故である

初心者の失敗に了る時は大體次の様な場合である。

- 一、ラダリング・ボジションになつても全然廻轉を初めずに轉ぶもの
- 二、ターンを初めてラダリング・ボジションの崩れ、終には倒れるもの
- 三、ターンの中途に外前に投げ倒されるもの
- 四、ターンの中途に尻餅をつくもの
- 五、ターンの了つた頃に内側に倒れるもの
- 六、ターンの了つた頃に外側に倒れるもの
- 七、ターンが過ぎて後送り起り、その爲、前に倒れるもの

一の場合

極く普通の状態の場合を考へるなら、ビューアクリスチアニアでは説明通りのボディスイングを行ふか又は、オープンクリスチアニアはそのラダリング・ボジションをとつて、両スキーをフラットにして居れば、必ず自然にターンを初め、一度ターンを初めたら、フラットのスキーは必ず自然に説明した通のエツヂングを初め、何の造作もなしにターンをする。そして特別のボディスイングを要する迄もない程簡單に出来るものであるが、初心者の中往々、全然ターンを初め得ないものがある。此れには三通の理由がある。一つは未だ完全は無論の事、殆んぎスキーをマスターして居ないものであつて要するにまだ直滑降も出来ない者である。此れ等はまだターンを初めるには早すぎるものであつて、まだまだ直滑降を練

習する必要がある。今一つの原因はその練習者の運動神経が特に鈍いものである。それはラダリングポジションがよく出て、可成スキーをマスターして居ても、不思議に體が硬くなつて、上體を無意識の中に逆に向けやうとするものである。數多い練習者の中には時々此種の人を見る。此の種の方は單にクリスチアニアのみならず他の動作にも必ず進歩の悪い人である。最後に往々見るのはあまり多くエツヂする場合である。體重は何れの足に委ねても、その委ねた方のエツヂを強く立てすぎるとエツヂがエツヂだけで進行して行きどこ迄も直線に走り轉ぶのである。此れは特に踏硬められた練習場等で見るものであつて、淺乾雪の場合には殆んど無い。此の時はその倒れた後を見れば必ず、委重した方のトレースのエツヂが深く雪中に曳かれて居るのを見て判るものである。

二の場合

ラダリングポジションの腰脚の確實性が無い事に起因するものであるから、特に初めのラダリングポジションを固く保つ様に心懸けねばならない。此れは假令倒れるに至らなくてもトレースが甚だ悪くなる。そして、此れは淺乾雪で比較的高スピードの時後脚に體重を委ねてやるクリスチアニアに多い。ピユアクリスチアニアでは全くバランスングが悪いが完全な上體の姿勢にならないで廻轉中に體の力を弛める事による。又ラダリングポジションの破れるものには往々、前スキーのテイルが後スキーのテイルに重なつて起る事がある。一般に、オープンクリスチアニアの場合後が重なる事は不都合であるが、よく生ずるものでさげがたい事である。これはあまりオープンがすぎたか前スキーの前出が不足か、スキーのテイルが長すぎるか、テイルを中心にせず、足を中心にする場合に起るものである。

三の場合

多くは説明した様な腹を出し、そり身になる姿勢をとらずに腹を引いて上體を前屈みになる爲である。スキーのターン中には最も多くの雪の抵抗をその前半分に受ける爲、どうしても上體はその方に倒れがちであるから、特にその姿勢に就ては氣を付けねばならない。

四の場合

腰及び脚の力の弱い人、或は急に抵抗の少くなつた場合、即ち、淺乾雪から凍雪に變つて居る所に、ターン最中に乗り入れた場合、後足委重のオープンクリスチアニアでは時々尻餅をつく。

五と六の場合

如何なる練習者でも必ず一度は經なければならぬ過程であると云つて良い。取りもなほさず、バランスを得ない爲である。此の過程を充分經驗して後に各スロープ、各速度各雪に應じたバランスをのみ込む事が出来る。そして、前記兩種のターンに於てはどちらかと云へば前足に委重する方は後足に委重する方より谷側への轉倒には有利であり、又山側への轉倒には谷足に委重する方が有利であるが、全體から見ると山側に體重を懸ける方が確實性が多い。初めに谷足に委重するクリスチアニアから練習し初めた初心者が何日の間にか山足に懸る方に移るのを見る。これは多く此の左右に倒される必然的に來る練習時代に自然に或る無意識裡に變遷するものである。

雪としては各自に最も不慣れな場合には上達者でも往々これに失敗する。濕雪地方の人が乾雪にあつた場合、乾雪地方の人が濕雪、粒雪に會つた場合等である。又、粒雪、下が凍つて居る表上乾雪の時には往々廻轉が意外に早く、然も横滑りが大の爲内側へ倒される事があり、濕雪時には外へ投げられる事が多い。要は練習にあるのである。

七の場合

特に後足に體重を委ねるオープンクリスチアニアの時に起る。そしてこれも可成り多く見る一つの練習の過渡期であつて、悲觀す可きものではない。只、何時そのヒールウェイチングからトーに移るかをその雪そのスピードによつて知る事に努めねばならない。

ダウンヒル、クリスチアニア (第四のクリスチアニア)

スキートイングのターン中で最も六敷い技術は何であるかと云へば、ダウンヒル・クリスチアニアであると云ひ得られや

う。テレマークやステームターンのダウンヒルは比較的廻る事それ自身は大した困難では無いが、クリスチアニアにあつては特にそのターンの初期が中々體得し難いものである。

アップヒルのオープンクリスチアニアに於ける動作は直にダウンヒルにも應用し得る筈である。然し實際は左様な譯には行かず、殆ど全ての場合に於てビュア・クリスチアニアは不可能と云つて良い位である。又、主に前に出した脚即ち廻轉の内側のスキーにその體重を委ねるオープン・クリスチアニアは不可能と云ふ事は無いが、その廻轉の最初から内側即ち谷側に體重を委ねる事が可成りダウンヒルをさまたけるし、かつやり難い観がある。

アーノルドラン氏は元二二年か元二三年かの英國のスキー年報にダウンヒル・クリスチアニアは前スキー即ち内スキーに委重す可きものと云ふ彼の古い主張を取消して外スキーに委重す可きだと訂正して居た様に思ふ。然しこれとても、絶對のものでは無い様に思はれるが大體に於ては前即内スキーの體重を抜く方がターンの初期は容易であると思はれる。そこで次に述べる二種のターンの最も良く用ひられ、且つ大に實行し易い方法である。

一、主に廻轉する外側のスキーに體重を委ねる方法

二、ターンの初期は外側のスキーに體重を委ね、後半に於て、内側のスキーにシフトする方法、即ち、アップヒルの場合の兩者を混用するもの

雪に對しては、アップヒルの出来る雪であるなら、必ず出来る筈である。即ち、硬雪が表上淺雪の場合は應用される。速度に支配される事は少いが、スロープが餘り急である場合は不利益である。

主に外側の脚に委重するもの

(一)、斜滑降の姿勢からその體重を山側のスキー即ち廻らうとする外側のスキーに體重をシフトして、後にあつた谷側のスキー、即ち廻轉の内側になるスキーを前出させる。兩膝とも屈けるが外脚の方がその膝を深くまける範圍でトロー・ウエイチングを保ちやゝ反身になる。

(二)、前スキー、即ちターンの内側になるスキーの前を開いてラダリングポジションとし、そのスキーは完全にフラット

に保つ。外スキーは自然の状態で外エッジが立つて居る。そして上體をやゝ内側に傾ける此の姿勢を確持して肩を前スキーと直角に保して居ればスキーは谷側に廻轉を初める。

(三)、廻轉を初めれば次第に尻を外側に捻つて右肩を下げる。そして全く谷にスキーが向へば、次第に後脚はヒール・ウエイチングにうつる。これから後は、アツプヒルと全然同一である。

(四)、欲する方向に向へばスキーに同等に體重を移してトールウエイチングなる。

ターンの中期にシフトを變へる方法

(一)、(二)、は同じ。

(三)、廻轉を初めたなら、常に肩を後スキーと直角に保ちながら、尻を外側に捻り出す様にして内の横腹を伸す。そして外スキーが完全に下を向く少し前から次第に外スキーより内スキーに體重をシフトして行き、外スキーが下を向いた時、丁度兩スキーに平均體重を配る。そして前膝をやゝ深く屈ける。

(四)、猶、廻轉が進む間に全く前スキーに體重を移してトールウエイチングになり、その間に外向きにして内肩を前上に張つてアツプヒルと全然同様の姿勢に移る。

要領は大體に於てアツプヒルと大差は無い。只、初め、ラダリングポジションに移る時に、その前スキーのアウトサイドエッジを立てずにフラットに持する事と、決してニールウエイチングに初めない此の二點にある。然し、此の二點は、ダウンヒルクリスタニアの最も重要な要領である事を忘れてはならない。

ラダリングポジションをとる時、アツプヒルの場合は直ぐその前スキーのアウトワードエッジを少しく立てゝ同時に後スキーのインサイドエッジも立てるが、ダウンヒルの場合にはその位置の關係上、實際に後スキーのインサイドエッジを立てる事は不可能である。然し、前スキーのアウトサイド・エッジを立てる事に多少無理をするなら不可能では無い。然しダウンヒル・ターンに於ては特にそのフラットにする事に注意をせねばならないのは次の理由によるのである。

第一にはアウトサイドのエッジを立てる事は、斜面と足の位置の關係上甚だやりづらい仕事であるから、無理にそのエ

ツヂを立てる爲には体に無理を生じて、結局バランスングを悪くするの原因となりやすい事がそれである。第二には假令前スキーのアウトサイドエツヂを立て、而も上体を上手にバランスし得ても、後スキーはそのアウトサイドエツヂを用ひて居り、その両スキーは、エツジングと云ふ點のみから見れば全然相反する方向にその廻轉の傾向をもつて居る。つまり前スキーは谷に向ふ傾向が大で、後スキーは山に向ふ傾向に勝れて居る。かゝる場合は余程そのランナーは腰と膝を確實に保つて居ないさ、そのラダリング・ボジションは甚だ容易に破れるものである。加ふるに、もし前即ち内側スキーのアウトサイドエツヂを立てるには足首を極端にまけるか、体全部を廻轉の内側即ち谷側に立てる様にせなければならぬ。足首を捻ぢる事は或る程度にしか出来ないから、大小はあれ、兎に角体を内側に傾ける事を豫儀なくされる、その結果又前スキーに委ねる体重が増加して益々その両スキーの廻轉方向を相反せしむる事大となり、益々ラダリング・ボジションの保持は困難になつて来る。此れ即ち第二の理由である。更に第三には、萬一前スキーのアウトサイドエツヂを立てるとしてもその結果雪の抵抗が大であつたり雪面が不整の場合であると、そのエツヂが雪に引かかつて廻轉中大きな抵抗を受ける。その様な場合はアツプヒルにも同様に起るものではあるが、アツプヒルの場合は、スキー自身が急より緩にその速度を變じつゝある時であるから、同じ程度の理由で受けるショックもアツプヒルの場合はそれを感じる事が少いが、ダウンヒルの場合には、緩より急にその速度を變じつゝある時であるから、体の受ける抵抗は甚だ大きく感じられるのである。此の三つの理由の下に、ダウンヒル・ターンの初めにその前スキーのアウトエツヂを立てる事は特に注意して避ける様にせねばならない。然しその廻轉が進んで全く下向きにスキーがなつた時は、もう、アツプヒルをせんとして居る時であるから、アツプヒルに述べた要領を用ふれば良いのである。

扱て、前記した二つのダウンヒルのクリスタニアは、その全く下向きになつた後、後足即ち外足に体重を懸けたまゝヒールウエイトに移るものと、その後前足即内側スキーのト・ウエイトにその体重をシフトして、アツプヒルの、前足に委重するものと二つある譯であるが、その前者では、外足のトよりヒールに移る時期と時間、後者では外のトより前のトにシフトする時間時期の問題は中々解決に困しむものである。

時間的に云へば、その動作を瞬間的にやる方がターンそのものはその半径を縮め得る云ふ便があるが、兩スキーとも抵抗を受ける（乃至は受け得る）運動体をして居る時であるから、此類の動作を瞬間的にやる事はそのショックの變化を大ならしめてそのバランスングを破る事をなす。故に之等の動作は或る時間内に初め且つ終らすが良い。その時間は無論一定のものでは無いがもし許されるなら、ウエイチングスキーが真下を向いた時を中心に、ターンの全体のコースの約五分一位を此等の動作即ち、シフチングなりフロム トー ツー ヒールを行ふ様な氣持をもつが良いと思ふ。

大体に於て以上の説明の通りであるが、初めからアップヒルターンと同様内側のスキー、即ちターンの初めの前スキーに委重しては不可であるかと云ふのは可成の問題である。無論、此事は決して不可能の事ではなく、又よく此れをやる人がある。決してやれない事では無いが、結局やる必要が無いと云ふ範圍のものである。初めから、内側のスキーに委重する事はその足が他の足よりも下方にある爲、多少ぎこちない氣持になり、従つて、やりにくいと云ふ欠點がある。且つアップヒルターンで説明した通り、もしスキーの埋る雪の場合には前足委重はラダリングポジションが破れ易いものである。加ふるに前述の通り、ダウンヒルの初期にはその兩スキーが互に相反した廻轉傾向を帯びて居るから、猶更、ラダリングポジションの支持が困難であると云ふ大欠點がある。それであるから特に此の方法を練習する必要がないと云ふのである。次には、前記兩種のターンの内、何れが良いか云ふ問題であるが、此れも又決定的のものでは無いが、大体に於て轉倒をあまり嫌はない場合には、外側の足の方に委重して廻る方法を可く、成る可く轉倒を欲しない場合には後者をとるが良い。此の兩種のターンで前者は、ターンに要する速度の點は勝つて居るが、轉倒には比較的にもろいものである。それは、アップヒルターンの時と同様の理由をもつて居る。

ダウンヒル・クリスチアニアに於ては特に或る目的物を中心にそれになる可く接近してターンする事を練習する事が大切である。此れはテレマークやステムターンのダウンヒルの場合よりもつと大切な練習法である。

徒に長文を弄して讀者諸兄に御迷惑を感ぜさせた事を許されたい。而も猶自分の云はんとする事をあまりに多く言ひ残して居る様に思ふが此れで擱筆する。

スキー登山とスキースポーツと

赤 松 勳

山のみならず更に進んでスキーを利用し得るだけ利用しそれ以上はシユタイグアイゼン、ピツケル、ザイル等の力を必要とする登山をも含むものである。換言せばスキーを登山に用ひた場合は私の云ふスキー登山である。

さてスキースポーツと云ふは現今行はれてゐるクロツスカントリレーシングやスキージャムビング等がその主なものであることは言を俟たない。

二

スキー登山は冬期又は春期に於ての山岳登攀にスキーの利用に依つてなされるものである。故にスキーは冬期又は春期の登山に於ては欠くことの出来ぬミツテルである。此は單に時間の經濟を計り、活動を容易ならしめるばかりでは

スポーツと云ふ語を廣義に解釋すると勿論スキー登山もスキースポーツの中に入るべきものであるが之を狹義に解釋するに即ちゲームをなす運動をスポーツとするとスキー登山はスキースポーツとなし得べきものであるか否か此は疑問であると思ふ。私が之から述べんことを要旨は單にスキー登山とスキースポーツと對して兩者間の關係を述べるのである。故に先づ最初にスポーツと云ふものに對して私の假説を許されたい。即ちスポーツを狹義に解して競技をなす運動としたのである。而してスキー登山はその外にあるものとしたのである。

尙此にてスキー登山と云ふはスキーを穿け得る範圍の登

なくスキー滑降に依る享樂は非常に大なるものであつてスキー登山に於て下山の際のスキー滑降のみを目的として登山をこゝろざす様な人も可成澤山ある。たしかに森から森へのボーゲン、スラローム、或は直滑降は決して忘るゝことの出来ない登山スーベニアとなるのである。

私は下降をのみ想つて登山する人は悲しいかな眞實の登山者即ちアルピニスト(アルピニストといふさなんだかその言葉に既に高いタイトルがある様に思はれてならないがこゝでは邦語に解せられてゐる意味をとる)とは云へぬと思ふ。登山は登ると云ふことに第一意義を持つてゐて下降はそのアツペンデックスを考へる。

スキー登山の際に於て下降の際のスキーの享樂が念中に全然ないかと云ふにさうではない。勿論念頭にあるがしかし之は登山に要する筋肉労働と、それに依つて受くべき愉快さとを經濟的立場から見るのである。エコノミストの金科玉條としてゐる『最小の努力を以て最大の効果を得ん』とけだし下降の享樂を思ふはこの見地に基くのである。

あのニセコアンヌプリの豪壯な滑降に肉を躍らし、手稻のブツシユの森のボーゲンに神技をなすは人間に賜つた尊いアートである。こんな場合にはどうかするとスキー滑降

のために登つて來た様にさへ思はるのであるがしかし矢張山は登らんがために登るのであるといふ思想はどうしても念頭から取り除くことは出来ぬ。

さてスキースポーツを考へて見ると、私にはあまり體驗がないから至言を盡すことは出来ぬが、スキージャンピングのランナーがジャンピングそのみに於てとすら絶大の興味を感じて凡てのスポーツの極致として居るが私は此の言を肯定するものである。此は昨年及一昨年公開された獨逸映畫マーベルス、オブ、スキー *Marvels of ski* (Das Wunder der Schneeschuhe) を見た人はあのすばらしいジャンピングに思はず感嘆の辭を發したことと思ふ。人技の極致と云ふもそれは過言ではあるまい。

クロツスカントリレーシングのランナーが競技會に於て最大の榮譽を獲得せんとして不斷のトレーニングをなし、タイムの縮少ミコースのセレクションに、又スキーテクニクスの撰擇應用に努力する、そこにも又言ひ得ぬ興味の存することと思ふ。恰も陸上競技のスプリンターがタイムの縮少のために努力に努力を重ねてブラクチカルエホートを收める以上に雪期のランナーの努力はより多元的であ

るがためにそこに生ずる効果とそれに伴ふ快哉はより大なるものが存すると思ふ。

以上述べた様にスキー、ジャムビン、クロツスカントリ、レーシングのランナーはゲームをなさなくとも充分の豪快感を味ふことが出来るが、しかしこのスポーツの精神としてはゲームのスポーツである。勿論クロツスカントリ、スキー、ジャムビン、登山にて行はるゝは言ふまでもなく、ジャムビンに於てもある程度にまでは用ひらる。然しスキー、スポーツとしての生命は前述せる様にゲームにある。故に競技的に之等が行はれてその興味は擴大し、競技の範圍が大となるにしたがひその効果も大となつて来る。かく相對的であるがために優越率の大なる程結果して来る愉快も大となる。そのマキシマムはナンバー・ワンになつた時である。即ちレコードなるものが絶大の價值を有するのである。

三

登山は登山者即ちアルピニストにとつては勿論人生の終局の目的ではないかも知れぬがしかしアルピニストの生活から山の觀念を除くことは出来ない。之はスポーツマンの生活からゲームを除外することの出来ないと同様である。

登山はアルピニストにとつては生活の手段である。登山するここに依つて自己の懐ける不快の感覺を除き得るのである。此の不快の感が登山の動機なるのである。此にて云ふ不快の感とは大きい範圍を有するもので又人に依つてその感覺に非常に相違のあるもので換言せば登山そのもの範圍内に於ても勿論でその外登山以外の自己の環境に對する不快の感にも云ひ得らるゝと思ふ。

前者は理想的に登高を考へることに依つて現在體驗せる自己のエクスパリメントがあまりに幼稚であるとかその他の理由に依つて感ずる不滿即ち不快で換言せば登高の理想化である。本當のマウンテナリングは登高の理想化によつて進歩發展すると思ふが登山は以上の理由のみならず、後者で云ふ不快の感は今社會に雜居してこゝに生ずる不滿と不快とが動機となつて山への道を求め大自然の胸に懷かれて現在我即ち主觀的自我を忘却して登山中の一瞬時たりとも詩的自我又は客觀的自我的心的境域に入ることを求めて坂路を登ることである。

勿論此の二つの山に對する動機が全く單獨に存するかと云ふに恐らく大抵の場合は兩者の融合せるものだらうと考へる。もし後者の様な動機を初登山に懷いて居た人も次第

に前者の思想が加味して行くものと思ふ。

故に登山に於て一つのグループが一人のリーダーに引率されて登攀をする場合にその目的は山頂を極むることに於て一致してゐるだらうが非常に危急なアクシデントに遭遇するとか、大きな障害が前途に横はらない限りは恐らく各自は獨特の思索に耽つて一步々と進んでゐるだらう。登山には競争的意識は全然ないと云はれぬが登山にとつて必ずしも必要なものではない。

スキースポーツに於ては競技と云ふ意識を忘却してはその存在の意義は殆んど云つても過言ではあるまい。スポーツは競技することに依つて進歩し發達して行くのである。スポーツマンはスキージャムピングにしろクロツスカントリーレーシングにしろ又その他のあらゆるスポーツに於ても兎も角コンペチターより優越せんとする征服慾（之は適切な語でないかも知らぬが）を第一に心底に懐いてスポーツをなすのであつてスポーツには此の征服慾の觀念が最も重大なもので此の觀念の大なるものが結局最終の榮冠を獲得するのである。故に十分の一米をも遠く飛ばんとし又五分の一秒をも縮せんとする事に最も意義深いスポーツの精神が宿つてゐると思ふ。

四

さてスキー登山とスキースポーツとは大体以上の様な目的及び性質を有するのである。次にその本質的相違について二三示して見ると

一、スキースポーツはその言の如くに競技的に行つてその眞價と満足とを得るのであるがスキー登山は競技的觀念を必要としない。

二、スポーツは競技が目的であるが登山は競技が目的に非ずして山に登るに云ふことに眞價と満足とを得るのである。

ファーストアセントなる言葉が登山には存在する。之は或意味に於て競争を意味してゐる。しかしファーストアセントはその山岳に對して單に一度しか用ひられぬ言葉である。故に登山といふことから見ると餘程特殊のこゝである。即ちその山岳は『登り得る』といふ保證を付けるのであるからその登山者には其山岳の開拓に對する絶対の價値と榮譽とを與ふことが出来るが、之は地球上に存在する有限、即ち寸時を以て數へ盡すことの出来る山岳の上になさるゝ言葉であつ

て現在に於ては既にその大半はファーストアッセメントが行はれてゐるのである。

三、スポーツはスキーを穿くことに依つて生ずる競技である。スキー登山はスキーを穿ける範圍は之を利用し、それ以上は他のグーツを用ひて登高の目的を達す

四、スポーツは場所的の制限、例へばシヤンツエとかコース等の制限があるが登山に於ては自己の思ふ儘のコースをとり思ふ儘のスキーテクニクを使つてよいのである。

五、スポーツに於て技術には技巧と確實性とを必要とするが登山には確實性が必要であつて技巧は第二の問題である。

六、スポーツは第二者、第三者を必要とするも登山には必らずしもその存在を必要と認めず、登山は登つてゐるもの自身に興味があつて第三者にはあまりに興味は少ないがスポーツは第三者は競技者と異なつた興味を持つてゐる。クロスゲームであると競技者それ自身より大なる興味を持つのである。勿論その場限りではある。要するにスキースポーツは派出であり登山は地味である。

大体以上の様な相違がある。故に兩者は全然そのスタン
ドポイントを異にしその支配する領域を別にしてゐるのである。

五

翻つてスキーの發達史を見るに Richardson の "The Ski-Runner" に依ると、遠き昔に中央亞細亞の降雪地方に其の發祥の源を有し、それがスカンデナヴィヤ半島に傳來して此でスキーの發達を見るに至つたと記してゐる。この事は知悉の事柄である。

最初は所謂畑スキーであつてそれが狩獵とか軍事に又はその他の實用に供せらるゝに至り十八世紀に入つてスキーが南歐スイスに傳はつてこゝにアルペンスキー衛即ちリリエンフェルトのテクニクが考案されアルペンの山々にスキーのスパールを刻するにいたつたのである。

北歐ではフィットフェルト氏を中心としたノルウエーのテクニクが使はれて、此の兩テクニクが發達し、現今に於ては兩テクニクの和合折衷したテクニクが發達して來たことは既に山とスキー紙上に於て先輩の發表せしところである。



アシュベツ岳(二)

坂 本 生

それと同時に十八世紀頃よりスキーの競技會が北歐の地に於て行はれ、終に今日の如くインターナショナルの競技が毎年開催せらるゝ様になつた。

今やスキーはスポーツへと向つた。此はスキー其れのみを考へて見たら當然の歸結である。スキースポーツの發達は即ちスキーの發達である。

再びこゝにスキー登山とスキースポーツとを考へて見るとスキースポーツはスキーの直系であり、スキー登山はスキーの側系であることはいなまれぬ。然し之を全然異つた立場から見ると即ち山ミ云ふものにスタンドポイントを置くとスキーは必要ではあるがスキーはミツテルである。スキーを活用せんがために登山者はそのテクニツクの習得が大切であるが競技的行動は必要條件に入らぬ。

私は最後にスキー登山とスキースポーツとに關し此の二者を混同してはならないと思ふ。それは既に幾回も述べた様にスキー登山とスキースポーツとは全然異なつた立場を有するのである。即ちもしスキーそれのみを考へる時はスキースポーツとなり山のみを考へる時にはスキー登山なるからである。



スキー競技練習の一般的注意

岡村源太郎

スキー競技云へば直ちにジャムピングとデイスタンス

レースが挙げられる。そして競技種目は一般にジャムピングのみの場合、競走のみの場合、及びジャムピング及びデイスタンスレースとのコムビネーションの三つが採用せられて居る。我國では未だコムビネーションレースは行はれないが以前にはスラロームレースが可成重大視せられた事もあつた。猶スウイス人の得意とする軍事競走も昨年シャモニーのオリムピックで行はれたらしい。猶之等の競技種目を更にシャンツェのアプローチの長さや、競走の距離等で更に細く分けて居るけれども、要するにジャムプと競走とが根本になつてゐる。従つて此處に述べようとする競技者の練習上の注意なるものも、ジャムプ或はデイスタンスレースの技術を大いに鍊つて競技會に奮闘せんとするスキー

一家に對する一般的助言に過ぎない

スキー競技者の生活

スキー競技練習者は、スキー競技に於て自己の有する技能の最高を示す爲に、己が身体並びに他の各種のコンディションを最も良好ならしめなければならぬ。それが爲には日常の競技に對する練習、廣く云へば競技者の生活が極めて重大なものであつて、之に依る最良のコンディションに加ふるに優秀な技術及び素質が立派な記録を残す原因となるものである。

此の競技者の日常の生活の重大なる事は、必ず競技者自身の中に深く銘しおくべき事で、之が一般のスキー競技者に廣く好く了解せられ行くに従つて、此の事が一層直面目に力強く實踐せられて行くべきものである。それはあ

たかも、スキー登山者が常に敬虔なる精神を以て、雪と氷に深き身心の刻みを入れて居ると何等異なる所がない。又競技者は雪のシーゲレンデに活躍するに就ての眞誠の努力、理性的な考案を大いに必要とするのである。

勿論スキー競技たる以上は、優勝の幸に當る人は唯一人で、競技の規模が大なれば大なる程勝利の喜びに與り得る機會は少くなる。然し他のスポーツでも同様であらうが、競技者の良く酬いらるべき結果は全然勝利のみに存するものではない。競技當日までのスキー生活に寧ろ多大の價値が見出し得るものである。自己の有する体力或は運動精神等の素質に對して、己が技能を猶一段と高からしめんとする努力そのものが最も尊かるべきである。競技の結果が運に支配せらるゝ場合の比較的安からざるスキー競技に於ては、並ならぬ素質と幸運に恵まれた優勝者の一方ならぬ苦心も特筆すべきであらうが、又翻つて他の競技者に於ても捨て難き價値に富む練習生活の極めて多い事に注意しなければならぬ。

最良のコンディションを得るには

さて競技者に取つて甚だ重大なる練習を行ふに就いて、競技者のコンディションを最良ならしむるものは規則的な

生活方法である。而も之は極めて簡單ではあるが甚だ嚴格なる意味を有して居り、我々は日々の生活に於て、全ての場合に此の規則的生活を忘れてはならない。それは起きて居る時でも又眠つて居る時でも、或は職務に従事し居る時でも實際スキーの練習を爲て居る時でも、或は食事に就ても、此の一貫せる精神のもとにあつて、生活様式の規則正しい事が最大の効果即ち最良のコンディションを得るものである。即ち精神的にも肉体的にも最も保健的な目的に適合した、よく合理的に規則づけられた生活法が採らるべきなのである。

猶此處に問題となるのは酒煙草等の嗜好品或は濃厚なる茶コーヒー等である。アルコール性飲料の練習者に不可なる事は既に明かな事で、身体の抵抗力を弱め諸内臓器管に對し種々の有害作用を有して居る。殊に長くスキー競技に好成績を收めて居ようとする者は、是非アルコールより遠ざからなければならぬ。之は少量死でも常用する事は眼に見えない侵害を受くる事となるもので、殊に正式練習中のスキー家は絶対に口にせぬやうにすべきである。多少の營養的價値があり寒氣を忘れしむる手段とはなり得るけれども、之は全て癡癡的に働く結果であつて、従つてその効

は殆ど失はれて居るのである。寧ろ練習後の一杯の砂糖湯等の方が、實際に保湯的、營養的に働くので最も推奨すべき飲物である。

煙草も練習者には禁物で、ニコチン中毒には深く恐れを持つ必要がある。猶茶コーヒー等も濃厚なものは勿論身体に有害であつて、殊に就寝前の飲用は實際に不眠の原因となる事多く、従つてよく注意しなければならない。之等は極少量の時には僅かばかりの興奮的作用が有効に働くけれども、又心臓等の作用を弱める傾向も少くない。

之等の刺戟劑は全く老年よりは若年の成長期にある人により大なる影響を與ふるものであるから、殊に若い練習者はより深い自制と周囲の人々の注意が必要である。正しい習慣を保持して行く事が、一方に於ては極めて容易な而も有効な助けを與へる事になるのである。

猶無益の事柄に精神或は身体を勞しては勿論充分な良コンディションを得る事は出来ない。或は競技に關して餘りに意を用ひ過ぎ、單に神經質になるのみでも、反つて身心に悪影響を及ぼす事になる。猶注意すべきは性的交渉に關する事である。之は我國では餘り説かれては居ないやうであるが、練習者が性的生活に遠ざかるべき事は可成重んぜ

られなければならない。又之に關する刺戟にも成るべく遠ざかるようにすべきである。練習中の遺精が起り易く、之に依つて競技の結果に影響を及ぼす事が少くない。思ひ掛けないコンディションの低下を見る事のあるのは、其の遺精に依る直接或は精神的の消耗作用が働くものと考へられる。

之に反して、極く廉潔なる生活による精神の清新や、規則的生活に與へられる適度の温浴、マッサージ或は其の他の身体に對する細心の注意は甚だ有効な結果を齎すわけである。又日常の休息にも注意し、充分の睡眠を得る事に力め、食事に對しても力めて衛生的なるやうにすべきである。

正式練習

前述の如くスキー競技者としてのスキーは大部分練習より成つて居る。規則正しき生活と共に競技に對する合理的なる準備練習に依つて、技術の進歩と体力の増進が遺憾なく果さるべきである。そして練習無しでの競技出場は極めて無意味なもので、各人の有する素質を基礎とした、正式の型に填まつた而も系統立つた練習が是非必要なのである。

猶此の練習は一年限りの繼續では決して充分の効果を擧げ得るものでない。注意深い目的に適つた手段に依り、又

一方は本来の健康を害する事無く、幾シーズンかに亘つて忍耐強く而も潑刺たる精神を以て練習を続けなければならぬ。それが競技者自身に取つては最高の効果を收める動機となり、又スキー競技そのものに對しても、長く老年までも繼續し得る一般的スポーツと成さしむるのである。

練習は積雪期のスキーシーズンに際して最も重要であり又興味も深いものであるが、従前の目的を充分達するには此の正式練習の外に猶補助運動に依つて一年を通じての練習方法が考へられなければならない。

積雪期の正式練習は一年中の練習中最も重要な部分で、トレーニングの主体を爲すものである、之は大体二期に分けて考へるがよい。第一期は雪がスキーゲレンデを訪れてより一月初旬までの、餘り重要な競技會の開催せられない時期で、第二期はそれより二月中旬までの雪質雪量がスキー競技に最も適當するに至る所謂スキー競技時期である。第一期は要するに競技に参加するまでの實のある練習に力を致すべき時で、重大であると共になかく困難な時期である。競技に際して役立つだけの充分なる体力と最良のフォームを得る事を主眼とする。又コンデイションを申分なきものとする爲に、競技に關係ある全ての條件を良好なら

しむべく力めるのである。

第二期は第一期に於て一定のプランの下に行はれた練習が續けられた後に於て、愈々真興味のある競技に出場し、又その競技時期中今まで作り上げた技倆を最高に保持して行かねばならぬ時である。人によつては實際競技に出場する回数は一回味より無い人もあらうが、又多ければ數回或は十數回の競技出場回数を有して居る、然し如何なる場合でも一週間乃至一ヶ月の間は、そのスキー家としてのそのシーズンに於ける技倆の最高が充分に保たれて行くべきで身心のコンデイションはもとより体力、フォーム等が最善に在らなければならぬ。又多くの競技に参加する事に依つて、今まで錬えられたジャンプなりデイスタンスレースの技術は一段の磨きを加へられ、一層完璧に近づかしむるのである。

競技参加前 (第一期)

第一期の練習開始は、その年の初根雪の遅速によつて異り、従つてスキー地に依つても大きな相違がある。樺太、北海道は割に早く、十二月初旬より始められぬ年は殆ど無いが、本州のスキー地では之より半ヶ月乃至一ヶ月の遅れを見ないわけにいかない。北海道でも遅の好い年は十一月

下旬には全く熱心な練習に取掛り得る程で、少しスキー練習地の撰擇でもするなら、十一月中旬の練習が大抵確實に行はれ得る。然し實際は第一期の練習は一月初旬まで一ヶ月乃至一ヶ月半位の所が普通で、北歐あたりでも二ヶ月以内が普通とせられて居る。南國スキー家の練習開始の遅れるのは致し方がないが、之が反つて豫備運動に對する熱誠が多くなつて、結果体力による補足が起り易いのではないかと考へられる。

兎に角正式練習開始は豫備運動と混じて行ふ程の意氣込みで、成るべく早く取掛るがよい。雪が割に少くても危険のない小規模のシャンツエや抵抗の多いシャンツエを少し手入れて軽い練習より初めるがよい。又日當りの少いロインの上なら、雪は浅くこも平地滑走や緩傾斜面の登降の練習は充分出来る、雪も夕方近くなれば餘り不愉快を感じる事もない、かくして一日も早くスキー運動に必要な筋肉を慣らす必要がある。如何に巧妙な補助運動でも到底スキー運動と同様な運動を求める事は困難であるから、練習開始當時の不慣は早くスキーを履けば履く程早く過ぎ去つて後の練習を自由に行ふ事が出来る。

次に充分の積雪が来ると共に、愈々練習の核心に入つて

行くわけである。ジャムバーか、クロツスカントリランナーかに依つて、それ／＼専門的な練習に従事するやうになる。唯此の時コムビネーションレースの練習は、兩方の技術を平等に獲得しなければならぬので、可成困難な練習となつて来る。我國では未だ復合競技の行はれた例はないが、この困難な練習を続け、よく恥かしからぬ成績を得るには、餘程の技術及び体力に對する素質が豊かでなければならぬ。

此の時期には正しいフォームを獲得する事が極めて重要であつて、練習者は始めは勝敗等を殆ど度外視してフォームの改善に力を致す事が出来る。幸ひスキー競技殊にジャムビングはスタイルが随分重要視せられて居り、之に對するスタンダードフォームも研究せられて居るので、フォームに對する注意も可成重んぜられて居る。實際ジャムビングはスタイルを作り上げる事は、飛躍距離を増す事に對して必要欠くべからざる事であつて、正しいフォーム即ち飛躍の確實性と美しさが先づ第一に考慮に入れられなければならぬ。確實性の無い所には何等の大膽さも、餘裕ある動作も生れて來ない。不合理な姿勢が一〇の力を費すよりも、正しい姿勢で、五の力を用ふるやうな人のみが、距離

に對する進歩の餘地を有し居る事を忘れてはいけない。殊に我國のスキー界に於て然うである。

従つて練習用に充てるシャントエも最初より規模の大きな、手も付けられぬやうなを用ふるのも愚の至りである。又一般的スキー術に通ぜぬ間にデイスタンスレースの練習のみを強く行つても、同様に僅かの効果しか得られない。重要なのは型である、この型を作つてから始めて大きなシャントエに於て或は長距離に對する練習を行ふべきである。此の注意を忘れた者は、何時もスキーの折損や負傷に依つて罰せられて居なければならぬ。

それで未熟者にあつては、殊に此の點に注意し、改善せらるべき缺點に就いて、着々と改正を加へて行くべきである。素人考へのスタイルを度外視した、單に距離のレコードのみにあせる練習は、スキー術殊にジャムプには最も禁物である。又デイスタンスレースにしても、最初は比較的軽度の練習で、専ら型の習得に努力し、正しい走り方自己に適する各種の條件を整へる事に注意し、研究的に緩やかに歩を進むべきである。そして競技の行はれる第二期までに最高の効果を獲得し得るやうにしておけばよい。

第一期以後

愈々競技に参加する機會の多い第二期には、秋の補助運動の先の第一期の正式練習とに依つて得た己が技能をよく此の數週間の間最高の能率を擧げ得るやうに保持して、常に良コンディションに在るやうにして過ぎねばならぬ。殊に此の期はコンディションを良く保持する事が必要で、簡単な事であるが一寸した寒胃でさへも影響する所が甚だ大きい。第一期の場合の如く時期を待つてコンディションの恢復を待つ事は、此の場合には不可能である。

ジャムパーは完全な弾力に富む筋肉を充分保護し、負傷等に細心の注意を拂ふ、クロツスカントリランナーは呼吸法の注意、練習後の身體の保護に充分意を用ひなければならぬ、又數回の競技に出場する事のある時は、前回に於ける經驗を又貴重な練習經過の一つとして、猶研究的精神を失ふ事なく、スキー競技者としての技倆を一段々鍊磨するやうに努力すべきである。

かくして競技シーズンが終れば、練習者の今までの身心の緊張も稍解けるであらうから、ほんとうに自由な心になつて廣くスキー術の練習を爲すがよい。各人の好みに従つて、各方面の研究を續け、又一方よく築き上げたコンディションを長く保持して眞の健康を保つて行く、勿論それら

の専門的練習は全く中絶してはいけない。そして春の融雪期に近づくにつれ、漸を追うて程度を弱め遂にスキーシーズンを終る事になる。

スキー競技者にとつては又日々の練習記録が大いに有用なものである。日記的にその日の練習成績の如きものを雪質、使用スキーの状態等と共に記入しておくのは、進歩を促す手段として缺くべからざる事である。又之によつて練習に對する興味も一層深くなり、若し年と共にレコードの進歩が現はれて來る時には、最も力強い鼓舞者になつてくれる。

休息及び睡眠

冬季の練習中には、天候の關係で練習不能の事も時にあるが、又別に休息日を置く事は甚だ重要な事である。然し競技者は各種類の雪に慣れる事が必要であるから、雪が悪いかたと云ふて練習を中止するのは宜しくない。

休息日は練習が効果を良好ならしむる爲には、必要缺くべからざるもので、休息に依つて得た疲労の恢復、精神の更新等が、次に來るよりよき技術を充分に獲得せしめてくれる。疲れ切つた筋肉が硬直を起しさうになつて居る時、身體の甚しい倦怠を感じる時等は、宜しく適當の休息によ

つて體力の恢復を爲さねばならぬ。猶又適當の休息日に依つて疲労を除去し得ない程の強度の練習を避けなければならぬ、練習不足と同様に、決して最高の結果を與へてくれない。反つて甚しい體力の消耗や、心臓等に働く有害な作用の爲に、遂に長く練習を中止せねばならぬ身となる恐れがある。

休息日は人によつて異なるが、少くとも一週一日の休息は取るやうにしなければならぬ。私は第一期は一週に一日乃至二日、第二期は二日の休日を含んで練習して居る。歐洲スキー家でも一週二日の割が最も多いやうである。香氣な短時間のスキー散歩位をやつて、休息日を過すがよい。

かゝる充分なる練習と之に適する休息日をおく事に依つて、スキー競技者はよくそのベストを保ちつゝ、立派な成績で長年月の競技に親しむ事が出来る。而も何等の障害を受くる事も無く、一層確かなる身體の強健を期する事が出来る。時には前述の如くして我々が耐え得らるゝ練習を、全く休み無しに數ヶ月にも亘つて続け得られ、且立派な成績を擧げて居る人も見受けらるゝ事もある。然しかゝる頑健なる體力の保持者は、更に前述の如き合理的な練習方法を當て填めて行つたならば、一段と光輝ある結果を見るに

至るであらうと考へられる。

休息と極めて密接の關係ある睡眠は、又練習者に取つて可成注意を要すべき問題である。睡眠時間は普通七―八時間より少くはない。練習の激しくなつて來る時期には十時間以上の睡眠を必要とし、猶身體の發育最中にある若いスキー家はより多く眠る必要がある。而も充分の熟睡が必要であつて、日々の練習の疲勞を出來得る限り解くやうにせねばならぬ。

就寢は比較的早く八―九時頃がよい。元來睡眠は十二時後の一時間よりも十二時前の一時間の方が遙かに効能が大きいのであるから、夜早く寢、朝早く起きる主義を取るがよい。六―七時の起床が適當であらう。従つて夜遅くまでの談話や喧噪は互に戒める必要がある。遅くまで眠つても早く寢ただけの休養が得られず、従つて不愉快な氣分を以て翌日の練習を爲さねばならぬ事になる。

猶就寢に際しては、一切のくだらぬ想ひを胸に抱く事なく、競技の結果或は自分の競走者に對する事柄等を考へないようにすべきである。無念の状態で速やかに眠りに入る習慣をつけなければならぬ。

寢室は競技者の安眠を出來るだけ充分ならしむる爲に、

他よりの刺戟の成るべく無い所を選ぶがよい。殊に合宿練習の際には宿舍の撰擇に可成影響を及ぼす、又室内の空氣の流通が必要であつて、新鮮な空氣に缺乏するやうではない。餘り暑過ぎる部屋も不適であり、殊に炭火を盛んに起して閉ぢ切つておくのは炭酸瓦斯中毒を起す危険が非常に多い。

猶睡眠中は身體の右側を下にして横になるがよい。之は左側を下にするよりも心臟に對する關係が好く、仰向けになる事は又夢精を起し易い傾向がある爲である。人によつては不眠に苦しむ事があるが、之は少し練習を強くする事によつて除く事が出来る。然し過勞の甚しい時にも充分な熟睡に入れない事があるから注意を要する。止むを得ぬ時は睡眠劑に頼らねばならぬ事もあるが、その時に應じてその原因を除く事に努め、就寢時に成るべく精神を鎮靜せしむる事は重要な習慣の一つである。

補助練習

熱心な補助練習に依つて、一年を通じての競技に對する準備が完全にせられ得るもので、既に春或は夏の候より取掛つておく事が必要である。概して夏季の練習は冬或は秋に可成強く働く我等の身體を、全く休息せしむる事無きよ

うに、絶えず運動に與らしむる爲に必要なのである。それでスキー家にしてサムマースポルトをも有して居るものは融雪期より九月頃までは、その各人の得意な運動をやつて居ればよいわけである。然しスキー運動も同様な筋肉運動を必要とするスポーツが最も適して居る。又肺や心臓等を強健ならしむる運動が、デイスタンスレーサーに取つて申分ないものである。即ち一般にランニング、跳躍或は體操がよく、従つて野球、陸上競技、蹴球、水泳等が適當して居るわけである。殊にジャムバーは跳躍運動、レーサーは長中距離のランニングがよい。

猶デイスタンスレースでは、その平地滑走或は登行の動作より考へて、漕艇及び登山が見逃し得ない効能を持つて居る事が明かである。之等は何れも夏向きのスポーツで、水泳と漕艇或は登山は夏季の準備運動として最上のものである。従つて平常でも登山の機會を多く有して居る者は練習上極めて好都合である。

最初はかゝる準備運動に依つて、春及び夏を過し、涼風の豊かになる十月頃よりは更に前述の運動を強めて行かなければならない。又此の時は一層スキー運動と同様な筋肉運動が必要になつてくる。そして十一月中旬乃至十二月

初旬までに、積雪期の練習に對する準備を成し遂げなければならぬ。殊にデイスタンスレーサーにとつては、體力の増進を充分に遂げしむる事が甚だ重要であつて、全身の運動に缺くべからざる肺、心臓の鍛錬を爲し、脚、肩、腹部の諸筋の發達を大いに期すべきである。且つ長時間の激しい勞作に對する不屈の忍耐力もこの時期より附與せらるゝやうに力めなければならぬ。それで此の目的に對しては、長距離ランニング或はクロツスカントリーをやるが最も良い。始めは一〇分乃至二〇分位の繼續からやつて、次第に時間を延して行き、最後には一時間位の練習も行ふ事がある。普通三〇分位が適當の所であつて、一時間以上のクロツスカントリー練習をやる必要は餘り無い。又此の頃には散歩がてらにも二本の杖を携帯して、杖を突く練習をやつて見るがよい。杖のみによる練習は私も可成試みたが、興味少く身體に對する影響も如何かと怪まれるが効果は確かにあるらしい。

要するに補助運動は自己の體質や好み或は其の他の状態に應じて、各人がそれ／＼最も便宜ある方法に依るがよい之が最も冬の結果を良好ならしむるもので、不愉快な思ひをしてそのスキー家に不向きな補助練習を爲すとも望まし

き結果は得難いと思ふ。

最後に食物に就いて一言しなければならぬ、之は一般のスポーツ練習者に於ける、何等變りなく、消化し易き滋養に富む物を適當に攝取する事が眼目である。猶食物は咀嚼を充分にし、又飲物に就いても周到の注意を拂ふ。食事時間は判然と決する事は出来ないが、朝は七―八時、晝は十二時―一時、晩は就寢前二時間前位が適當であらう。強い練習を爲す時は食後二時間位の間隔を置く必要がある。勿論食事の直前直後の練習は禁物で、殊に空腹時の練習は是非避けなければならない。唯軽い練習の前に消化し易き物を少量攝るのは何等支障がないらしい。猶食事に就いては又後に述べる機會があらうと思はれるから、此處には詳しい事は省略する事にする。

以上が大體スキー競技者に對する練習上の注意である。此の練習に對する概念を深く頭に入れ、廣く説かれて居るジャムプ或はデイスタンスレースの練習法に従つて練習を續け、又廣くは日常の生活の一部としたならば、少くとも何等考へ無しに慢然と練習した者よりは、有意義な練習日と、競技時期を過す事が出来るであらう。(一九二五、七、二)

新刊紹介

「山を思ふ」 第一輯

百瀬慎太郎、伊藤孝一、鶴飼盈治、酒井由郎氏等の發企で今春組織せられたる「山を思ふ會」發行の同著は八月八日附發行せられた。日本的にも著名な山岳家の組織せらるゝ會だけに同著も「山」を思ふ「山」と共に生活する人々にまつて非常に有益なものが蒐めてある。内容の一斑を示せば

○「アルペン」、ジンメル、櫻井和一譯 ○「山語の研究」星野清 ○「山育ち」鶴飼盈治 ○「山へ祈る」ルドフスキイ、望月市恵譯 ○「或る旅の記録」小池新一 ○「更生」グラアベル、望月市恵譯 ○「山の歌六首」林愛作 ○「鳥々より高知を経て船津まで」加藤正治 ○「やまゑび」酒井由郎 ○「白山禪定」小池新一

尙挿畫として伊藤孝一氏の雲の平より見たる祖父岳(二月)雲の平より薬師岳を望む(三月)、小畑尾峠より見たる薬師岳(二月)及び川上俊秀氏の尾瀬風景(六月)の挿入あり。菊版一七〇頁、三五〇部限定版、發行所東京四谷區本村町三六江口方「山を思ふ會」尙九月には第二輯の發行を見る由。(君生)

斷崖

— 山で死んだ一人の中學生に —

相川正義

1

こゝからは海も見える！

あゝやつと登つた山の頂。

海。海。

いくらお前が大波を立てようとも

この崖の下へはこどくまい

リュックサックをどしりと石に投げつけて

僕等の肩は翼の生えた程軽くなつた。

五月春の陽は

山頂の崖を照らして

眩しくしかも大きく咲いた花冠の様。

僕等の充ち充ちた誇りを量つて見るがよい。

2

量つて見よう、この青い空を。

掬つて見よう、この空に浮ぶ五彩の珠玉を。

崖の上に一所消え残つて居る雪は

置き忘れられた衣装の様に輝く。

今僕等の渴望は

その只一握りの純白の雪に燃え上る。

再びあぶない路を辿つて

でも只の二三歩だ

あの聖地まで行こう

崖の横顔よ

しかし自然に抱かれたものは恐怖を知らない

神液カクシキの甘さに酔つて若者は

一瞬後のカタストローフをはらんだ崖に

晴やかな微笑を送つたのではなかつたか。

3

おゝカタストローフ。カタストローフ

眼を射る雪の上を一寸這つた友の足よ

急に切り裂かれた青い空よ。

崖は百米以上も切立つて居た。

音もなく崖に血を吹きほとばしらせ

弾丸の様に落ちて行つたのは

そも何の姿だつたか。

友よ。

雪の上の慘ましい嘆きの刻印をみつめ

そして恐ろしい深い谷底を

這らばひ覗こうとする僕等の

胸をついて来る限り知らぬ動搖の心を

遙かなる君にどう傳へてよかつたか。

4

それは楯ではない。

木の枝を組み合せた貧しい擔架である。

けれど「若き者の死」は悲壯な光榮でなからうか。

さう云ふ僕等は狂つたのか。

顔、手足、凡て繃帯に包まれ

今は語らない君を捧げて

崖、叢林、石ころ道

村の停車場への道は遠く且躓き易かつた。

その小驛には不思議にも人々が集つて居た。

そして僕等にどつミ雪崩れこむものがある

肩をたくものがある。手を握るものがある。

「坊や何故死んだの」「坊や何故死んだの」

親一人、子一人。

その母には君はいつも稚けな子であつた。

その聲にハット胸を衝かれて、急に涙が溢れて来た。

無理にふり返つた路の彼方に

おゝ崖が

そして崖がゆらくと揺れて行く。

スキーの思い出 (二)

— 在留同胞へのスキー宣傳と苦樂 —

大野精七

僕達（神谷、木下、大野）は毎土曜、日曜をかけてシャウインスランド、ハルデに登山する約束をしたのである。

少しでも上達すればするほど興味が増して来て、お互に此の約束を實行し習慣となつた。譬へ雨が降つて居つても土曜の午後一時にはギンテスタールの電車終點で必ず落ち合つた。當時フライブルグ在留日本人は二十五、六人あつて醫學、哲學、經濟、宗教、林學等の研究者であるが、就中醫學研究者が多かつた。時々日本人の會合がある。若し土曜日の會であれば其の方は必ず欠席してスキーに出かけた土曜、日曜が僕達の書き入れ日であると云ふ事は人も許るしてくれたのである。町で雨があつても山上は雪ミ決つて居る。かくして私達はハルデ旅館の定客になつてシャウインスランドの粉雪を充分味ふ様になつた。段々にスキー仲

間（獨逸人）も出來て來た。スキー術も亦追々上達して來た。病理教室島海君も時々一行に加はつた。ハルデ旅館の夜はスキー裝の儘、おどる男女のシーワルツを見ない事は無い。我々は然し部屋で花合せやトランプを能くやつたものだ。あのストーブの傍へテーブルをよせて椅子の上にあぐらをかいてお互に鑄をけづつて居る時は、時の立つのも知らず充分日本氣分になる事が出來たのであつた。

歸路は樞クサの中をうねつて居る夏ならば自動車登山道路を滑つたのであるが、近頃は林間の近道（急道）を滑降し得る様になつた。

日一日ミ面白味が増して來る。自分等は機會ある毎にスキーを同胞に宣傳した。機熟して一月二十日土曜日（大正十二年）アシヨフ教室に居る日本人全部（但し木下君不在欠

席)と知己の獨逸人と總數十四人(スチーニング父子、マ
ルセロ夫人、ランベルツ、レンツ、ベルタ諸姉、牧野融、
同夫人、押川公介、三田村篤志郎、大野省三、神谷市彦、
烏海克己等の諸君並に不肖大野)の一行揃つてハルデへ登
山する事となつた。殆ど大部分がスキーをはいた事の無い
連中で一週間前から諸種の準備に取りかゝつた。牧野夫人
は急いでスキー装を新調される。今回は特に最も樂に登山
し得る方法を撰んだ。苦しくては行かぬと云ふ仲間がある
からである。即ち大型乗合自動車一臺を借りて、ギンテス
タールと反對側のキリヒツアルテンに出て、オーバリード
を経てスタインワーズに至り、此處から馬橋でハルデへ
行くのである。恰度土曜日故勤務の都合上午後出發の事と
し、二十日午後〇時半フ市停車場前に集合の手配をした。

其の日は昨夜の大雪で街道も眞白になつた。一同はスキ
ー装甲斐々しく豫定の如く集り、出發した。郊外に出づ
れば新雪は可成り深い。雪は止んで居るが天は曇つて居る。
見渡す限り雪野原、恰もシベリアの戰場へでも行く概があ
る。然し車内は婦人や子供づれ、自ら和氣が漂ふて居る。
キルヒツアルテンから登り道こなる。途中積雪深く屢々進
行を悩まれた。車がとまれば男共は車外へ出て人力車の後
押しならで自動車の後押しをする。辛じて次驛オーバリー
ドに着いた。此處より以上自動車の登行は不可能である馬
橋一臺此處まで出迎ひに来て居るが他の一臺は里の負傷者
を乗せてキリヒツアルテンへ下つたと云ふ。止むを得ず初
學者殊に足弱連を一臺の馬橋に乗せ、他は悉くスキーをは
いて登らねばならぬ。夏ならば自動車で登り得る山道であ
る。道を迷ふ心配は無い。只時が遅れて暗くなるのが心配
なのである。

一同はスチーニングの案内で登つて行つた。初心者のみ
であるので、ホーヘンブリツケ(六二〇米)邊から足並は
健脚の度に從つて大部差が表はれて來た。スタインワーズ
(七七〇米)に着いたのは夕刻に近い頃である。豫定で
は此處まで自動車で來て此處から馬橋でハルデへ登る積り
であつたのに、豫想外の大雪の爲め大に狂うてしまつた。

一同は草臥れて此處の一軒に飛び込み、御茶や温い牛乳
をもらつて休んで居る間に日は暮れてしまつた。牧野君と
ベルタ嬢とは一向に見え無い。二人は先きへ先きへと進ん
で行つたらしい。然し方が一、如何なる事が途中で起つた
か計り知る事が出来ないの、牧野夫人は申すに及ばず一
同は心配した。

我々の一部を乗せて来た馬橋屋は此の家の人でハルデ旅

館より依頼されて居たのであるが、余りの大雪に馬も疲れ加ふるに暗くなつたので若い馬橋屋青年は降参してハルデへ登る事を断つて来た。此れには一行大に閉口した。此處

から約一里上のハルデ旅館では我々を待つて居よう、此の一軒家では夜をあかす事もならぬ。能く事情を述べ懇願して馬小屋へ納めた馬を引き出させ婦人連を乗せてハルデへ送りまゝけてもらふ事にした。我等數人(スチーニング、神谷、鳥海、大野)は若しや牧野君等が迷ひ込みしに非ざるかを思ひ、一時遅れてハルデへの副道(間道)を登つた。

スチーニングを先頭とし、二箇の懐中電燈を頼りに、途中『牧野、牧野』と連呼しつゝ登り行つた。答ふるものは反響より外に何も無い。日本に居つては、こんな冒険はせなかつたであらうになど心配し乍ら、ハルデに着いたのは夜の九時過ぎであつたと思ふ。所が探し者の牧野、ベルタ兩氏は誰れよりも早くハルデ旅館におさまつて居たので、

一同すつかりまかれた型である。馬橋の婦人連が到着した後、殿の我々を迎ふ可く青年シユミツト外一名の學生は本道指して出發したのであるが、我々は間道を取つた爲めに入りちがひとなつて、出會はなかつたけれども其の御好意

を感謝した次第である。

一同は此の大雪を無事目的地に達したので其の夜は翌午前一時過ぎまで祝杯を舉げた。

雪のあしたの好天氣とは獨逸でも通有であつて、二十一日は意外の好天氣、見渡す限りの樅林は眞白な新衣裳をつけ未だシー、スプールを畫かれざるスロープは到る處人待ち顔であつたが、やがて多くの人からふみにじられてしまつた。一同は相當にスキーを味つた。或は甘んじてスキーに苦しめられたと云ふ方が當つて居らう。牧野夫人は仲々元氣でシャウインスランドに於ける最初の日本婦人スキー家たるを羞じなかつた。午後はギンテスタールへの正道を滑降して歸路に着いた。當時の苦しさとは愉快さとは教室に於ける話題として一同の間に反復されたのである。

獨逸フェルドベルグ、シー、 ヒュツテの二夜

S. C. S. (Ski-Club-Schwazwald)は諸處にシー、ヒュツテ(Ski-Hütte)を作つて居り、會員の宿泊をみるし番人の居る處では物などを會員に安くわけて居る様である。我々外國人も會員となり、其の特典を持つて居る必要がある。同

時に D. S. V. (Deutscher Ski-Verband) の一員とならざるを得無い。

スキー仲間としてガイス博士やヘス君を知つた。ヘス君は或る會社の社長で S. C. S. の幹部である。二月四日フェルドベルグ、スキー大會の際、盛んに采配を振つて居られた一紳士は君であつたのである。フェルドベルグ山上優秀の部位に氏の設計によるスキー小屋を持つて居る。一度拜見し度き希望を述べて置いたが、四月休暇(大正十二年)に僕達を招待してくれた。

フェルドベルグはシュワルツワルド中最高(山一四九五米)で幾つもの山が連立して居る。最高は可なり廣く平で上には二七米高のフリードリヒルイゼ塔が立つて居る。塔の下部に部屋あり、登山家が休息し得る様になつて居り、番人が居つて物を賣つて居る、塔の傍にはガストハウス、フェルドベルグ塔 (Gasthaus Feldberger Turm) と云ふ旅館(三〇ベット)あれども冬期は閉鎖されて居る。此の最高から五つの山脈が走り、其の間に深い谷が出来て居る。清天なれば南方シュワルツワルドの森を越えて遙に瑞西アルペンを遠見し得、最高の東方に三〇米低き鷄冠を隔て、ゼーブツク(一四五〇米)がある。頂上には大理石よりなるビス

マルク塔(一〇米高)が立つて居り、フェルドベルグ中で最も景勝の點とせらる。夏ならば椅子にかゝる事も出来る其の北方三三七米下方にフェルドゼー(一一三〇米高)ありて小アルペン湖水を思はしむ。

此の膝形に高き起伏は冬期理想的のスキー場である。傾斜に緩急あり、所々神秘的岩石有れども冬は雪にかくれて居る。約三〇〇米下方は比較的平らにして、樅カマキネの林立を見る。ゼーブツクの東方ホテルフェルドベルグホテルまで傾斜滑降はスキー家の最も痛快とする處である。ホテルは一二七九米の高所に在りてチーチーゼー停車場から夏は自動車、冬は途中から馬橋をかりて來られる。ベット三〇〇を有し諸般の設備あり、アルジョアのスキー家の集る所である。ヘス君の小屋へはホテルから約一時間登らねばならぬ。

四月十一日ヘス君所用あり同行し得ず、木下、合田(合田君は運動家にして當時木下君を訪問せるを以て同伴する事せり)の兩君はガイス博士(令嬢同伴十一歳)ロツシ君(法學部學生)の案内にて先發された。スチーニングと僕とは一日遅れて十二日午前九時頃發汽車にて出發ポストハルデに下車、其處からスキーで登る積りである。

此處で思ひ起される事は、スキーとは方面違ひであるが我が日本醫學の一人を知る機會を得た事である。同じ四等客車の人ミして自分の前に老婦人が居られて、日本に居た事があると言ふ。夫人は齡七十歳を超えて見ゆる、シユルツエ先生の令夫人である。先生は明治七年來朝されスクリツバの前に東京大學醫學部教授として外科及び眼科を擔當されて約六ヶ年我が日本に滞在されたのである。其の後フライブルグ市エリザベット街にシユルツエ先生私宅を訪問した當時、先生は八十三歳の誕生を迎へたばかりであつて御兩人共に至極壯健である。先生は盛に礦物を採集され近頃復た植物に興味を持たれて居る。老いても尙ほ研究心を捨てざる元氣には敬服せざるを得ない。來朝當時の寫眞二葉を頂戴したが角帶をしめて居らるゝ昔の學生中には片山、佐藤東大名譽教授、外二十一名の大先輩が居らるゝ。(故人多し)自分等はポストハルデに下車、暫くは徒歩に登り、やがでスキーを用ひた。リンケンの一軒茶屋で晝食した。聞けば先發隊は昨日此處に立寄られたさうである。茶屋の傍に小さなシャンツエが作られて居り、十歳位の兒童三人ボン／＼飛んで居るには驚いた。所謂樅の林をぬけ出で無林帯に登りフェルドベルグ山頂近きヘス君のヒュツ

テ(小屋)に到着したのは午後三時頃であつた。

山の最高より約一町ばかり下に南面せる山の傾斜をけづりて基底となし、約二間三間位の木造小屋が作つてある。

小屋の傍に長い旗竿が立つて居り、屋上には烏帽子形の小煙突が立つて居る。小屋の壁は三重にして防寒充分に出來に居り、地下室には薪炭を蓄ふ。東南に窓あり入口は少し引つこんで東側で南によつてある。入口を入れればスキー其他の物置兼玄關となつて居る。右隣中央部が居間兼寢室兼臺所である。窓は上下にガラス戸ありて換氣採光に注意してある。窓際(東南)の一角には角なりに腰掛が取り付けられ、西の壁際には竈兼ストーブが置いてあり部屋を暖むるに充分である。山側即ち北の壁には寢臺兼ソファとして使用さるゝものを取り付けられ、其の上には汽車の寢臺の如く折り返してつり床二箇を作り得る様になつて居る。收縮し得るテーブルが窓の一角に在る腰掛に近か寄せ、他方に小椅子を添える時は立派な食卓となる。尙ほ北の外側に、けづつた山の土壁との間に下げが増築され、ベツトを増してある。小屋より四五間下方に清水がわき出て居る。私共が着いたので御茶の饗應をうけた、菓子は各自持参のものである。御茶でも食事でも濟めばキッチンミ洗つて一

定の所へしまつて置く、一人が茶碗を洗へば一人が其をふく。一人が其をしまつと云ふわけである。やがて地下室から木材が取り出された。スチーニングとロツシ君とは鋸で挽き始めた。ガイス、木下、合田君等は其の挽いた木を斧で割り出した、自分は此の共同生活を見物し乍ら此の有様を寫眞に撮つた。

其の後暫くスキーを練習し、序に山頂に登つてフリードリツヒルイゼ塔内の番人から繪葉書とチョコレートを買ひ、木下君は巻煙草を買つた。小屋に歸る中間も無く晩の炊事に取りかゝつた。ロツシとスチーニングとの兩君はオムレツを作り始めた。各自のリユツクサツクから提供された罐詰、腸詰、チーズ、バター、ジャム等が出る。尙ほ一本のワインが出て互に健康を祝した。午後十一時汽車の寢臺的ベツトにもぐりこんだ頃、窓外では盛に雪が降り始めた。かくして我々は雪にとざされた高嶺の小屋に夢を結んだのである。

翌朝(十三日)眼を覺せば昨夜來の大雪でシユワツワツワは眞白く衣更へされ、満山未だスブルーを止めずと云ふ光景である。一同飛び起き小屋下の清水にて洗面す、ロツシ君は眞裸になつて水をあびられた。ヒユツテから東方

五六間はなれて半分以下雪にうづもれたボツクス形の小屋(大便所)がある。雪のトンネルを通つて行かねばならぬ朝食後日の事など話し合ひ、東大、北大の兩スキー部にスキーの友人へ繪葉書を書き、一同の署名を乞ふた。又小屋所屬の記念帳にヘス君への感謝の意をしたため特に日本文字にて署名した。

今日の晝食は御禮三日獨親善の意味を含め一同をホテルフェルドベルゲル、ホーフへ招待した。フェルドベルゲル東へ少しく下り、更にゼーブツクの頂下に出て、此處から約二〇〇米下へ急勾配で下ればホテルに達する。附近に少しも障害が無く理想的のスロープである。自分は此處を一本の直滑降にて下る自信は無かつた。嘗て自分が一學生に案内されて此處に來た事が想起される。それは自分が獨逸でスキーをはいて四回目の事であつた。友は一直線に滑降して最早や其の姿が見え無い。残された自分は未だ充分急勾配に於ける制動法を知らなかつた。直滑降して加速度の恐しく高まつた頃には故意に轉倒せざるを得ない。其の時不圖上方を見あげると、妙齡の婦人がボーゲン、スラローム等で、やすやすと下りて來るではないか、自分は不審驚かされ、婦人に及ばぬ其の未熟を概歎したものであつた。

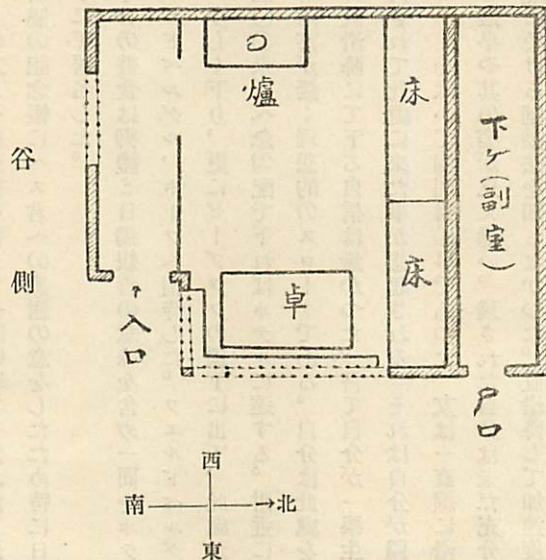
四月中頃のホテルはスキー客が著しく減少して居るが、其れでも可なり澤山のクールガストが居らるゝ、食堂の一角をしめた我々七人は温き食事に充分舌鼓を打つた。ガイス博士はフライブルグ高等學校の教授で、フ市運動團の副團長（團長はアシヨフ博士）である。學生ロツシ君と共に雪のみ、雪しらみの練名があるそうだ。

もと來た道を逆行しゼーブツクを越えてフェルドベルグの最高に登つた。頂上の北側は斷崖で雪崩れをなして居るガイス君の先導で其の一部を登つて見た。ロツシ君は木下君と僕を伴ひ少し滑りあるいた。就中非常に急な所をステムクリスチアニアの妙技を以て降つて行かれ、下から我々を呼んで居る餘り急で自分等にはステムボーゲンをかゝ事が出来ない。左右の半制動でふみかへ乍ら下つたミ云ふわけだが、其の當時の自分達の足は極めてもろかつたと承知して居る。木下君が新調の黒ツボンを破つたのは此の時であつた。

小屋では食料が少し不足して居る。スチーニングと僕とはトートナウエルヒユツテまで買出しに行く事となつた。夕暮の薄暗がりを約一町間隔をへだてて立つて居る木標目當てに下だる氣分は、戦時斥候にでも出た様な感じがしたの

であつた。仕入れたものは鶏卵と牛乳少量、今夜のオムレツはガイス博士が製造役である。昨夜の残りのワインでは

ヒユツテの略圖



あるが最終の一夜を陽氣にしてくれた。手製の口笛でダンスが始まる。合田君の琵琶や日本の盆踊（ワンステップ）などが出る。山の神様も異様の響きに驚いた事であらう。

十四日朝食後、小屋の總てを整頓した。食器例へば皿、茶碗を清滌したのは勿論、ホーやメスまでも磨いて置いた戸締を嚴重にし小屋と長がの別れを告げ、スツーパー、ワー

ゼン、ノートシライを経てハルデにて晝食、此處からは例の縦の中を走つて無事歸宅した。愉快なりしヒュツテ内の生活はミても筆紙のよくする所で無い。

モン・ブラン初登山の話

加納生

いまから一四〇年ばかり昔のこと、アルプスの最高峰（四八一〇米）が初めて登山せられたときの話を少しばかり書いて見よふと思ふ。

登山史家のいふところによれば、モンブランの初登山はアルピニズムの近代的意義をける最初のものとして考へられてゐる。従つてこの話はその搖籃時代の有様をあらはしてゐる點を以て、一八世紀以來の山登りの傾向を見る上を以て甚だ興味あることなのである。

山が最初に見付けられる前に溪谷が訪れられる。今では誰もうなづくシャモニーの溪谷も、一七四一年にウインド

ハム、ボコックが、またその翌年にマルテルがこゝに遊んで、その結果この溪谷の存在が弘く知られる様になつた。當時 Mont Blanc は Mont Maudit、と呼ばれて、ゐたのであるが、その頃から、此の谷を訪ふ人々も増えて来て、女學者や自然科学者で後に有名になつた人々などもその中にまじつてゐた。ハーラー、ギボン、グルンネル等いふ人々はシャモニー溪谷の風光を書き記した主なる人々である。この Albrecht von Haller と云ふ自然科学者は早くからアルプス旅行をやつてゐた人であつて、一七二九年、ヨハン・グスネルとともにアルプスを旅したときのことを「Die Alpen」と

云ふ書物にあらはしたのであるが、此の著はアルプスを広く知らしむる點に在りて最初の重要なものであつた、と云ふことであつて、英、佛、伊、及びラテン語に譯されて數十版を重ね、今日尙生命をつづけてゐると云はれてゐる話は横道へはいつたが、此等の人々がシャモニーをして更に美しく傳へ世の視聽を引く様になつた。ところが一七六〇年になつて、ゲンフの自然科學者 Horace Benediti de

Saussure がやはりこの地に遊んで、問題のモン、ブランについて、その登攀の可能なることを認め、最初にその登路を發見したものに對しては賞を與へるゝ云ふことを發表した。だがその後廿年を経過するも一人としてその登路について何等の確心をも示すものがなかつた。Marc-Theodor Bourrit (1735-1815) と云ふ畫家は一七八三年より一七八五年迄三年間續けて登山を試みたが失敗した。Saussure が登山した一七八八年にも企てたが天氣が悪かつたために失敗したのであつた。だが此の人はアルピニズムの正確なる意義を定めた點に於て忘るべからざる人であり、彼が努力の畫は、一七八七年 Saussure の書いた「Voyages dans les Alpes」の中に載せられて燦然たる光輝を放つてゐる。また羚羊狩の Pierre Simond も二度登山を企てゝゐる。一度は

Glacier de Cheant より、一度は Montagne de la Côte 及び Glacier des Bossous より試みたがいづれも失敗であつた。かくて數多の人々の空しき努力のうちに、賞が懸けられてから既に四半世紀を経過して尙モン・ブランは千古の白雪を人跡に汚さるゝことなく、或は世界で一、二を爭ふ高峯であるかの如く噂せられて立つてゐたのであつた。

一七八六年八月八日、シャモニーの村醫者であつた、Michel Paccard と山案内人の Jacques Balmat とが、Montagne de la Côte の道から、この頂に達し、初めて問題は解決せられた、長い間、人々の驚異の心のうちにまた少からぬ興味を湧かした先登々攀の榮譽は此の二人によつて得られたのであつたが、こゝにはしなくも醜いエゴイズムがあらはされた。と云ふのは Balmat は聲を大にして彼の功績を誇張し、これが爲に後年の生涯を費したとさへ云はれ、實は Paccard は凍傷の爲に、頂上より遙か下の雪の上に座つてゐたんだと稱した。それで Paccard は却つて物笑ひの種になつてしまつた程である。元來この時の登山の有様を記したものは澤山あるが、その多くは、彼の佛の有名な小説家 Alexander Dumas (1802-1870) が初登山の後四年(一八三二年)に書き記したものに據つてゐるのであつ

て、年時の経てゐることもに、紛飾をまぬかれなかつたことは想像し得られる *Balmat* が可なりなホラを吹いてゐたことは、頂上では太陽が照つてゐるときでも、青空に星が輝いてゐたと云ふ様なことを云つてゐたことからも容易に推すことが出来る。

Saussure はその翌年の一七八七年八月二日に *Balmat* 以下八人の案内者と、一人の従者をつれて登山し、多くの観測を行つたのであるが、こゝに於て *Balmat* の星の話はバラされてしまつたと云ふことである。此の二人はモン・ブラン登攀の功勞者として、シャモニーの村の一角に銅像が立てられてゐる。*Saussure* が帽子を側らに置いて、杖をつきながら山を仰ぐ姿で表はされ、その左側に *Balmat* が右手をあげて山を指し示してゐるところである。こゝに於ても彼と同じく記憶さるべき一人の村醫者は全く忘れられてしまつてゐるのである。

かくしてモン・ブランの先登々攀は終りをつけたのであるが、翌一七八八年までに僅々五回の登山が企てられたゞけで、其後、一四年間と云ふものは、佛國革命其他のために、誰もその頂を訪ふものなく、一九世紀の初めより、即ち一八〇二年以後からは、續いて登山を試むるものが出で

た。がしかしモンブランが實際ポピュラーになるまでには尙三十年の歳月を要したのであつた。一八二〇年 *Dr. Hunt* と二人の英人が、表層雪崩のためにやられたのが、モンブラン最初のマクシデントであり、更に一つの興味あるエピソードをつけ加へるならば、その最初の婦人登山者のことである。一八三八年のこと、*Mlle d'Angerville* が頂を極めた。時に歳、四四歳であると云ふのも勇ましき限りである。當時雜誌に載するところの光景は、頂上にをいて男の肩に立ちながら、人々にさゝへられて、をそらくブラヴオーを叫んだであらふところの、珍妙なものである。

驢馬翁

— 蝸牛の旅日記より —

西村眞琴

好老瓜溝山に陣取つた我等は、天幕の傍で夜を徹して焚火を絶やさなかつた。此所は兎も角も千山山系の支脈に當りともすれば豹の襲來があるといふ噂に我等の神経は鋭く砥がれて居つた。

此烟は空高く漲りやがて其末が重く山陰に垂れかゝつた我等の地圖には全く載せてなかつたが其烟は此山陰に秘められた一つの部落に因縁の橋を架けた。村人が夢から醒めて、思ひがけない一條の烟を眺めた時、それは村中の大きい謎であつたのは無理がない。朝になつて我等が三脚から釣り下げた薬罐の湯を吞み廻して居る時であつた。騒がしい物音が谷の方から次第に近よるを覺えた。我等は旅行中に何時しか、斯うした物音に何か怖ろしい豫期を以て耳を聳てる習慣が作られて居たので、一同は申合せた様に立ち

上つて、谷をのぞいた——。

一番先頭に白鬚の老人が掌を後に負ふて上つて來る。其後から數多の若者等が、中には鞭を持った牛飼ひらしい男も交つて居る。最後の一團には女や小供もついて上つて來る。彼等は近寄ると、何れも申合せた様に、天幕の中を覗いた。それから我等の食事の内容に觀察の眼を投じた。これが日本人の間であつたならば當然苦笑に終るべきだが、此相互の珍客間に於ては、寧ろ不思議の念に導かるゝ緊張の面目を共に保つて亂さなかつた。けれども、だんだんと人が集まつて、忽ち我等天幕の周圍は、田舎に見らるゝ盆の堂前の庭の様に賑ふので、無邪氣な子供等は此きこちない相互の感情の底をこする様な緩和劑を投じた。子供を中心にしてだんくゝと會話が交換され出した。

半可通の支那語は一層此山村の彼等には、通じ難かつたので、豫て交渉司の役目を以て我が一行に参加して居た張といふ滿洲人によつて代表的に會話が發展した。彼等も相互の間が了解されて安神した。

此村人の中に最初から少しく離れた所に嚴に腰をおろして見るからに憔悴した五十歳餘りの男が居つた。黙々としてうるんだ眼を我等にむけて何事かを哀訴する様に見えた。辛烈な高粱酒に親しんだ者に見る様な光を失つた皮膚と多分の刺戟によりてのみ働くことの出来る程疲れを浮べ、馬の耳に念佛よろしいと謂つた呆然さの顔を猫背の上体に安置させた容姿が強い同情をひく。折々物を言はうとしては村の女達の饒舌に氣壓されて沈黙にかへるのであつたが遂に交渉司の張の通譯によつて彼の心願が判明した。

老爺の此山の中に多年病苦をなやんだ、界限で彼れの病を治するに効きめのあり相な草根木皮は大抵試み盡されたが怎してもはかばかしくない。殊に此頃になつて心細さが彼の人生觀を暗くし出し、朝夕酒に親しむ様になつた。年頃の娘を持つ親として言ひ盡せないといはしき、齒痒さが『もう一度、元通りの壯健な身となつて……』といふ悲痛な願ひが會話のうちに重く流れ通した。

『私は一頭の驢馬を持つて居ります。此驢馬と私は一生懸命に、大人達の荷物を城下まで運びます程に、何卒日本の大醫様から私の病氣を御診察して頂く様お取り計ひをして下さい。私は死ぬ前にせめて日本のお醫者様のお薬を一匙でよいから飲んで見たいのであります……』

彼は傍に立つて居る自分の娘を顧みながら述べた。娘は思ひ沈んだ表情をうかべて頷いた。

翌朝老爺は驢馬を曳いて來た。驢馬の背には我等の荷物があうづ高く積まれて先頭に立つた。

好老瓜講の山家を過ぎり山腹の半を廻ると千金溝の谷を見下す。遙かに白刃の如く輝くは太子河の上流である。我等は展望に心をやり胸を開いて悠々と歩いたが、長い草の小徑の中に老爺は前屈みの猫脊を見せ、腰の後に廻した骨立つた掌に手綱を握つてトボくと歩む、其後姿には明滅の燈に對する様な氣づかはしさがつきまとふた。

此地方でお城下と言へば本溪湖である。元宵の賑を夕の燈に人々は騒ぎ立てる。此老爺が三里の山路を驢馬の脊に土産を積んで歸途を辿りつゝ家に待つ娘を思ふあたりが眼に浮ぶ。

老爺は例の話聲に唾をのんでは娘の話をした。毎年ある

娘娘日の祭典には何を措いても美しい着物を娘にさせ度いといふ親心が、家計の事實問題に絡んだ魂膽話が出た。

晝近くには薄曇りの空から日光が強い光を射出して、油蟬が聲を絞つた。老爺は額に滲んだ汗を拭きもせず歩行に倦んだ驢馬を手強く引いて行く。路は安奉の細河の支流に沿ふて下る。山から轉落した亂石がいやに足場をヒョロつかせた。急坂を避けて妥協した路は幾度も此溪流を離れては又遭はねばならなかつた。仲間の一人が老爺に代つて驢馬の手綱をとり乍ら橋の無い淺瀬を渡つた時である。驢馬は其流れの真中に立ち留つたまゝ動かなくなつた。新しい馬子は驢馬の臀を推す様にして見たが、いつかな動かなくなつた。此儘細河の立往生されては我等は衣川の軍ご破れて了ふので又外の仲間が近よつて杖で頸の邊を軽く撃つて見たが驢馬は愈々動かなかつた。少しく遅れて着いた老爺は此様を見て表情に乏しい顔にも幾分の苦笑を浮べ乍ら驢馬の手綱を多謝して受け取る、驢馬の耳は一二度振る様に動いたと思ふと又のろ／＼と歩み出した。

自我の強い動物が意に添はぬ重荷に堪へ頸を長く伸べて引かれてゆく、曖昧な自我の男が此片意地な動物を制禦して行く所に面白味がある。

河の中で足をひどく迂らした老爺は遂々靴の紐を切らした。老爺は助を驢馬に求めて縋る様にして四五歩は進んだが驢馬は思ひ出した様に急ぎ出して老爺の手から振り離れて了ふた。老爺は流れに足を奪はれまいと見る眼も危い重心をとり乍らまだ河の半に在る時、驢馬はもう向うの岸に到着して自分の小便を嗅いで笑ふて居た。四脚の毛だ物にも斯うした皮肉を二脚の人間に對して振舞ふのであつた。河の中で卒急に操り人形を勤めた老爺も、やつとの思で岸に着いた。橋頭の町が、かすかに見えて道巾が廣くなつた。老爺は破れ靴を提げて小言もなく歩いた。彼れには大きい服従があつた。否それは信仰であつたとも言はれやう。

橋頭に在る滿鐵病院の門前に我等は老爺を伴れて立つた時、院長や看護婦の小綺麗さは老爺の氣持をまさしく壓倒したらしい。老爺の言葉はあやしくふるえた。日本人に馴れた張の通譯は一々院長の同情を寄せた。

院長の白い掌が老爺の脈をとつた時、恰もナザレの聖者の衣に觸れた病める女の信仰を思はせた。

信ずる者の一念は此山路を辿つて一封の薬に一切の希望をかけたのであつた——。慢性の胃病と診斷され、たしなんだ酒を禁じられた時、彼はあの山村に愈々人生の慰安を

我娘に對する愛一筋と限られて了ふた。我等の一行は彼れ等の爲めに二つの送り物を整へた。其一つは此病院の看護婦長の計ひで撰んだ赤い切れ布であり、もう一つは私の撰んだ老爺への支那靴の一足であつた。

驢馬は脊の軽くなつたことを以て獨自足れり顔に、トコトコと輕快に歸つて行つた。

彙報抄錄

今冬のプログラムと

スキー聯盟

第四回の全日本スキー選手權大會は全日本スキー聯盟の手で行はれることになつたのであるが、同聯盟では選手權大會の細目其他今冬のプログラムにつき加盟各團體の代表委員會を開催すべく準備中である。此の代表委員會への提案は各俱樂部より九月末日までに聯盟の方に申出て置かな

ければならないことになつてゐる。

同聯盟は今冬より最も合理的に日本のスキー界の統一、連絡のために種々の施設を行ふことでもあるから、日本のスキー界の大勢に順應し、また各地スキー團體の提携等の點を以て多大の便宜が得らるる事と信ぜられる。まだ聯盟に加入してゐない團體は此際加入の手續をとらるることをおすゝめする。加盟諾否は此の秋開かるる代表委員會で決定せらるるのであるから、九月中に申込まれるのが最もよい機會である。

H. U. S. V. 新着圖書

Skisport

Der Skikurs — Carl J. Luther

Der Skifahrer

Die Skischule

岩登り術 (藤木人三著) (R. O. C. 事務所より)

「登山」 (田中薫著)

北樺太探險報告 (大坂毎日社發所)

編輯後記

○夏休みだと云ふので、七月、八月中は「山とスキー」の會の連中も皆山に行つたり、故郷へ歸つたりして、火の消えた様に淋しかつた。並河教授が、農學會出席のため京都から來られたが、そんな理由でお目に懸れなかつたのは残念である。會の事務の方でも手拔りが多かつたらうと思はれるが怒せられない。

○横有恒氏一行が、カナデアン、ロツキヤに向け出發された事は前號にも一寸誌したが、全國の人達の熱心な期待に背かず遂に大きな成功を修められた。共によるこびに堪へない。尙一行が恙なき歸りの航海を了へられて、その光榮ある登高の詳細が私達の前に齎らされる事の早きを望んで止まない。

○秋風が訪れて來た。讀者諸氏も或は夏の登山の回想に、亦旅行の追憶の中に在る事でせう。けれど未だスキー靴をざり出したり、スキーの埃りを拂ふにはちと早い。幸ひに本號には充分なスキーの研究をのせ得た。清讀を乞ふ。亦西村氏の異色ある旅行記を戴く事が出來たが、今後余裕ある限り、本誌は、山岳及びスキー、冬、等の創作的方面の文章も載せたいと思つて居る。取捨は會にまかせられたいが、それ等の寄稿も戴きたいと思つて居ます。

定價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雑誌の代價は頂きます。

大正十四年八月三十一日印刷
大正十四年九月一日發行
(毎月一回一日發行)

編輯者 相 川 正 義

印刷兼 廣 田 戸 七 郎

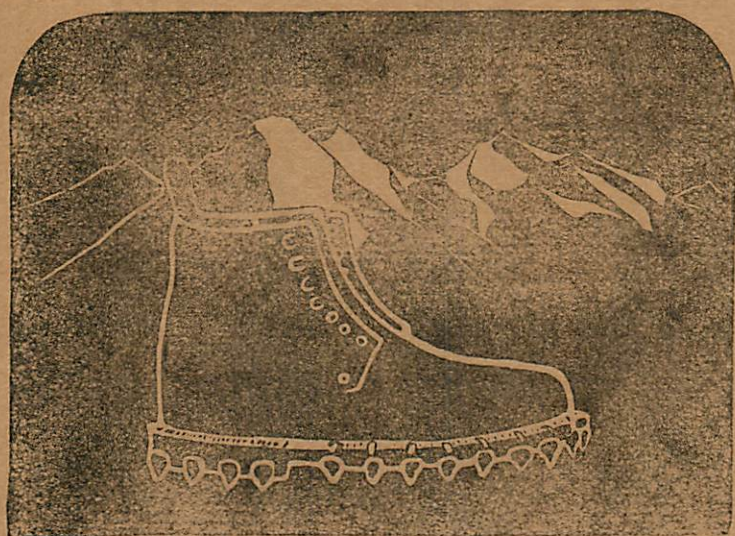
印刷所 札幌印刷株式會社

發行所 札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

